



標  
榮花物語抄

二





浦くのわられ此  
 卷をかく名づけし  
 犯せる罪のある  
 を以て伊周ハ掃  
 隆家ハ馬ハ配  
 流せらるる伊周  
 心ゆく思ひて  
 かみよあ  
 身も似るる  
 時名もまも  
 がうら  
 秋の洞小  
 いひさ  
 りとも  
 て世評ありし伊周  
 等の罪あらはれて  
 とかくの處置ある  
 ぞしとんこの沙汰

標榮花物語抄卷二



小中村義象  
 関根正直  
 標注

⑤浦くのわかれ

かくて<sup>長徳二年四月十五日</sup>因果ぬき世の中ふいひさるるまじつる事ども有るべきさまふんといひ定めておそろしうむづかしく内大臣殿も中納言殿もおぼし歎く<sup>伊周</sup>殿の御うとをさして御物いみ頻りなり官の御まつも只よもおはしまさねバ大か御心ちさへ悩ましう苦しうおぼさるまきバ卧しがちうて過ぐさせ給ふかゝる事どもおのづからもり聞ゆまきあなあさましやさやうの夢をも見バ我いかよせんいかで唯けふあを

走る由なりきりめ  
 くて私語するもむ  
 つうして今の祠小  
 氣味さうとりつ  
 が如し  
 たゞふもおもしろ  
 さねバ 尚懐胎の  
 りつ  
 かゝるもどもえ  
 伊周等の鬼神配  
 流小儀さあるも自  
 然小漏れされたと  
 なり  
 この殿原さてもい  
 かなるべきよらあ  
 らむ 殿原を伊周  
 兄弟とすすさて此  
 一向の世評をさし  
 さまみさるるもてか  
 く評あきどさりと  
 ては今多くとつ  
 くなりかゝる大法  
 この物語ふ多くあ  
 り心はおくべし

身を失ふもどきもがたとおぼし歎けどいづもせざる給  
 はん此殿原さてもいかなるべきふらあらん。さりこ  
 て只今身をなげ出家入道せんもいと誠におどろく  
 志からん事ハ、適るべきふもあらむ。只佛神こそとも  
 かくもせさせ給へと、<sup>数珠</sup>ずいをはなたむ。つゆ物もさこ  
 しめさで、歎きあかし思ひくらしたまふ。内よ陣み  
 みちの國の前守維のぶ左衛門尉惟時備前々司頼光  
 周防前司頼親などいふくも皆これ満仲貞盛が子ら  
 まご也。おのつはものども教志らす多くさぶらふ。  
 春宮の帯刀よ、澁口やなどいふ者ども、頼ひる侍らひ  
 て、関を固めなど志ていとうたてあり。世みハ大あな  
 ぐりといひつぐるもいとゆく。年頃天變などして、

おどろくしからむ  
 今さら  
 出家入道せんも犯  
 せる罪免るべき  
 小あらざともおど  
 ろくし俗は仰山  
 らうといふが如し  
 らちよ陣に内  
 東慈徳の所はく  
 寺の付する武官  
 の同候する由さ  
 刀流はく前注せ  
 り  
 関をかゝり 関が  
 んとして天下小者凶  
 のりある討つて  
 を撃つるもこれ  
 中あり  
 大あなぐり 又そ  
 てぬ後の養ふぬま  
 人あさりとといへる  
 所も注せる如く  
 大索とかきて京中  
 小強盜蜂起する時

兵亂など占なひま一つるハ、此事にこそ有りけれと、  
 よろづの殿ばら宮ばらさるべく用意せさせ給ひも  
 の、教ももあらぬ里人さへよろづよともせバ山よ  
 入んと設けをし、ゆくしき頃の有様なり。北<sup>貴子</sup>の方の御  
 せうとの、明順道順の辨などいふ人々、あな心うさは  
 かうふこそせハありけき。いかせさせ給もんずる  
 などもまし駭げど、つゆかひ有べき事ふもあらん。殿の  
 内ふ年ごろ曹司して侍らひつる人々、とありともか  
 りりとも、<sup>伊周</sup>君のならせ給もんまふこそはと思はで、  
 よろづをこぼちはこび、こぼめきの、志りてもてい  
 で運び駭ぐを見るふ、いみじう心細し。されどさなと  
 制し給ふべきふもあらず。よろづの人の見思ふらん

諸御府不仰せて捜索せしむるにや  
よなきひまらうし  
まじいまるし  
なり  
ともせむ云く  
やもせむ山中へ逃  
まて兵乱を避んと  
なる中  
殿のうち曹司  
て云く曹司今  
いふ部屋の手なれ  
どもこのふて伊  
周が家の構へうち  
なる難舎なご住  
みて召使しる者  
をいふ  
とありともか  
とも云く  
ありとも主の成行  
をえんしと思えど  
其宮小連坐せんと  
怒きて室内の器財  
など運びいで退

事も愧かしういみじう思さるる程ふ世の中ふある  
檢非違使の限りこの殿の四方ふち圍みたり。おの  
おほえもいぬやうなる者たちこみたるけしき道  
おほぢの四五町ばかりの程いゆきともせずいとけ  
怖ろしき殿の内の氣色どもいはん方なく騒がしけ  
きば寢殿の内ふおちしましある人多かきど人お  
はすけはひもせず哀ふ悲しきふかふるあやしけ  
者ども殿の内ふ打めぐりつゝかしこを見騒ぐ  
るけはひえもいえずゆる志げなるふ物のをさま  
より見出して有る限りの人々胸ふたがり心ちいと  
いみじ殿今い遁を難き事ふこそいあめをいかに此  
宮の内を出でく父道隆墓所木幡ふ参りて近うも遠うも遣はさ

敬まるをいふこぼ  
めく物とこぼつ  
音なり  
檢非違使のかぎり  
檢非違使の参前  
ふ注せりかぎり  
ありしけといん  
が如し  
けおそろけハ  
氣なり氣色怖ろ  
きなり  
かふるあやの者  
ども檢使は屬ま  
るいやし考まて  
近き世のさきま  
どい小者ならん  
ものんがま  
きるさい  
近うも遠うも云  
當時の律小流刑  
ハ遠中近の三身お  
れが近うも遠うも  
とをいへるなり  
おぼろげのもも歎

ん方ふまかるわざをせむと思ひの給はすふ此者  
どもたちこみたきおぼろげの音けだ物あらずバ  
出給ふべきかとなし。夜中なりともなき御かけも  
今一度参りてこそハ今はの別まにも御覽せられぬ  
といひ續け宣はすまよりえもいえず大き小水精  
の玉ばかりの御涙つぎこぼるる見奉る人いか  
が安からん。母北貴子の方宮定子のおまへ御をぢの人々例の  
涙ふも何らぬ御涙出きて此怖ろしげなる者ども  
宮の内ふ入亂きたきば檢非違使どもいとどう判す  
れどもそまもさはるべき氣色ならん。かふる程うこ  
の猥りかはしき者の中をかき口けさすがようるは  
くさうをきたる者南おもてま只参りよまある。こ

おぼろげにおぼれ  
けあらぬとあるべ  
きと略してかくい  
つる此頃の俗語  
て土佐日記源氏物  
語など多しあり  
大抵ならぬも歎  
らでハ逃まじんす  
難一とたり  
水さうのむむり  
のく 水晶の珠  
敷の玉といふべき  
と略せるく下ふつ  
づきこぼるゝとあ  
るもて知れんし  
太上天皇と云々  
は守上奏の末も  
えき太元法のみも  
そこふはせり  
稀世の師 つくし  
なる太字の指師不  
左遷せらるゝ也此  
例も月の宴の奏ふ  
はしおけり

い何し不かと思ふ程ふ宮命といふもの讀むなりけ  
り。聞けば太上天皇をころし奉らんと志たる罪一つ  
帝の御母后をのろむせ奉りたる罪一つ、おほやけよ  
り外の人いまだ行なはざる太元法を、私不隠して行  
なはせ給へる罪より、内大臣を筑紫の帥ふあして  
流し遣はす。又中納言をば、出雲權守ふあして、流し遣  
はすと、いふ事を讀みの、志るふ、宮の内の上、下、聲を  
とよみ泣きたるほどの有様、此文よむ人もあてた  
り。檢非違使ども、涙を拭ひつゝ、哀れ不悲しうゆゝ  
しう思ふ。其わさり不近き人々、皆聞きてかどをばさ  
したれど、此御聲ふひかきて涙とゞめ難し。さて今い  
出でさせ給へ。日暮れぬと責めぬのゝり申せど、すべ

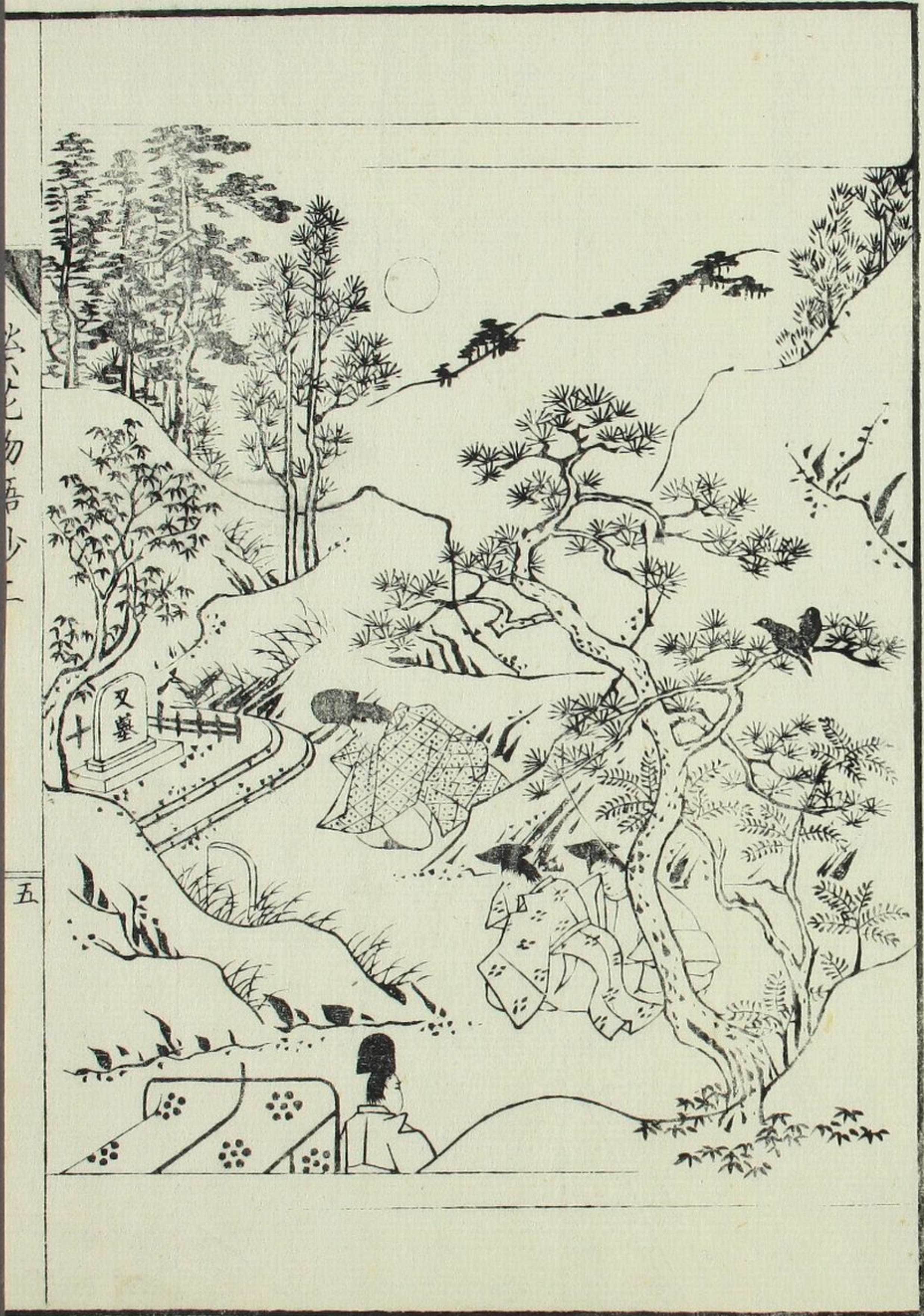
こぐらけは本  
の系流して聞きた  
いふ

てともかくもいらへたる人あし。内もかくいらへ  
たる人なきよしを奏せさせられ、なごてさるべさる  
ふもあらず。只能くせめよとのみ宣旨頻りなくたる  
ふ、かくて此日も暮せぬれば、内大臣殿、故殿今宵さそ  
ひく、ゐて出させ給へとおぼし念せさせ給ふ志し  
よや。そこらの人さばかりいひの、志りつれど、夜中  
ばかり不いさじう寝入りたき、御をぢの明順はか  
まど、御ともよ人二三人ばかりして、ぬままれ出でさ  
せ給ふ。御心のうち不多くの大願をたてさせ給ふ志  
るしよや。事無く出でさせ給ひぬ。それより木幡又参  
り給へるよ、月あかけれど此どころいみどりこぐ  
らけきハ、其程ぞかして推量りおはしまいて、かの山

卒都婆くぎ貫  
卒都婆ハ釋トモ  
墳トイ小本と刻み  
て墓標ふ立つるも  
のくぎ貫ハ柱と立  
あらべ橋木とぬき  
しもの墓所の柵あ  
り

そのおから云く  
去年道隆薨去れ  
おハ諸人あま死  
失せされハ墓標い  
づも白くてまぎ  
らてき  
人よりけふ けふ  
ハ飾りてといふ  
同じ法音あり溜る  
べくらむ

近みておりさせ給ひく、くれぐと分けいらせ給ふよ、  
木の間よりもり出でたる月を、るべよて、卒都婆く  
ぎ貫などいと多かる中、これハこそこの此頃の事ぞ  
かし。されバ少く白く見ゆれど、その折から人々あま  
た物し給ひしかば、何きふかと尋ね参らせ給へり。そ  
こよていよろづを言續け、伏しまるび泣らせ給ふけ  
はひ小驚きて、山の中の鳥獸も聲をあせせて鳴きの  
おしり、ものゝあはきをを知る。哀と悲しくいみじきよ、  
おは<sup>伊周詞</sup>しまし、をり人よりけよめでよき有様をと、思  
おきてさせ給ひらど、自からのすくせ果報のゆ  
ゆしく侍りければ、今はかくて都離きて、知らぬ世界  
ふまかり流されて、又かやう又無き御かげも、御覽



思ひ給ふる事侍ら  
ふいもと四段の法  
きなりが此頃より  
給へ給ふると下二  
段も活く一種の相  
出まらうこれハ今  
の法も存じき又  
尚座いなども云ふ  
如く人の上ふりふ  
べき敬語を捨てて  
ハ已がよもいふ  
と同じ趣きなり

おとしませ陣のお  
ハ云く 后宮のお  
そしませ近衛陣の  
おとしませをぬき

せらるやうも侍らじ。自から怠ると思給ふる事侍ら  
ねど、さるべき身の罪もてかくあさましきめを見侍  
れば、いづでいづ地も罷らで、今宵の内、身も失ふわ  
ざを、一てがな。無き御かげも御面伏と、後代の名  
を流し侍る。いと悲しき事なり。助けさせ給へ。中納言  
も同ドく流しつかはせど、同ト方、だふ侍らず。かた  
う、よ罷り別る。悲しき事、又ゆ、しき身をばさる  
ぬ。此より、宮の御前中宮定子の月ごろた、もおとしませぬ  
ふ、かゝるいみじき事、あはせ給ひ、つゆ御湯をだ  
よきこしめさず、涙も沈みておとしますを、いみトう  
ゆ、しうかたじけなく侍り。おはします陣の前ハ、か  
さをだよこそぬぎてわたり侍れ。かくえもいとぬも

敢ひて通せしふ  
とこ

かひなきがふ云  
云 云ふがひなき  
我身だふ離れける  
後ハ父君の御身か  
りと守宮の法、ふ  
添ひて加護し給へ  
れと云

北野 城州愛宕  
たう管神と記あり  
天満宮と号す

のども、おはします廻りふ立ちこころ、御簾をも引  
きかたぐりなど、して、浅ましくかたおけなく悲しく  
ておはしますと、も、たまくだひらかよおはしま  
さば、御産の折いかよせさせ給はんずらん。かひなき  
身だふ行末も知らずまかりありぬ。猶この御身  
離れさせ給はむ。たひらかよと守り奉らせ給ひて、又  
かけまくもかゝこきおほやけの御心ちあも、又女院登子  
の御夢たよも、此事答なるべき様と思はせ奉ら  
せ給へ。ちと泣く申させ給ふま、涙もおほせ給  
ふ。聞く人さへなき所なれば、明順聲も惜まず泣きた  
り。やがてそれより押し返し、北野小冬らせ給ふほど  
の道いと遙に辰巳のかたより戌亥のかたさまと趣

ち啼きぬ 脱の  
結なきて表の  
くちをいふ下  
月廿四日也とある  
より逆算されど  
こ、ハ廿三日  
こ

塗籠 ぬりご  
とと物なと納れを

かせ給ふ。参りつかせ給へれば鳥啼きぬ。そこよて又  
なくくいみじき事どもを、申續けさせ給ふ。此天神  
小御誓ひ立て、ぎえおとする人よて、申給ふ事限りな  
し。官人もヤ驚くと、急ぎ出でさせ給ふ程小むげよあ  
けぬ。いかよせんと、彼所よいらせ給はん程も駭がし。  
猶此わたりふと、かく暮させ給ひて、夕方とおぼす程  
も、彼所の御有様ども、哀よりしろめよく思せど、猶暫  
しやすらはんと思して、右近の馬場の口よりふと、  
こほらせ給ふ程、定子官よい昨日くともふし事どもあり。  
今日とくくと宣旨頻りなり。さても中納言隆家ハ在るけ  
はひ志侍り。伊周帥ハすべて候らはぬふしを奏せさせ  
バ、あさましき事なり。定子官をさるべう隠し奉りて、塗籠

うん料小家のうち  
ふ一石壁あつて塗  
りこめしる所あり  
くみし組入りて  
格子天井のりあり  
細き木を方形よ  
さし組みたるふ  
りて然る  
はちたしとかく  
まへき道なきとい  
ふまるとも道ま  
條理なきいしん程  
なり几帳なきは  
せり

薄鈍の直衣  
薄ふびと喪服の  
色あてを墨あ  
といた國村の刺  
父の死後一年ハ  
之を着るはや  
直衣と前小袷  
このやの云々例

をあけて、くみれのかみなどを、見よとあり、宣旨頻  
りよそふ。御塗籠あけさせ給はん。定子官さりおまかせ  
と、檢非違使申せば、今はすぢなとて、さるべく几帳  
など立て、浅はかなる様よておまかせ、隆家檢非  
違使どものみよもあらび、えもいとぬ人して、此ぬり  
ごめをさりのある音も、ゆしうあさましう心憂  
し。さは世の中ハ、かくあるにぎよこそありけと、目  
もくれ心も感ひて、涙たふ出でず。隆家中納言殿も、我よも  
あらぬさまよて、薄鈍の御直衣指貫着給ひて、あさま  
しくて居給へれば、人々畏まりて、近うもえ参りよら  
ぬふ、このやのあやしもの者どもの入亂れて、志えたる  
氣色どもぞ、浅ま志ういみじき。さてあけたまども、お



の拾便が引具まる  
手下の者どもも  
えたる景色といふ  
まの色あるといふ  
よしくあされあ  
さるといふ捜索する  
る

あやしの網代車  
あつろハ格式あき  
車なれば大りも  
通ふも微行も乗  
用を治と知らせし  
とそ

はせぬふしを奏せさす。出家したるふか。さるもても、  
唯今ハ都の内を離るべきふあらずふくあさあ  
と宣旨頻りなり。檢非違使どもかついあつくいこじ  
う思ひなづら宣旨のまよするふおましまさぬい  
とあさましき事よて、すぢなしとて、其あたりさらす  
夜晝守るべきふしの宣旨頻りふあり。かくて今日も  
暮まぬいと浅ましき事なり。いかゞさるやうあらん。  
檢非違使ども事あやまりたらば、皆科あるべきふし  
きくも、其夜よ一夜いもぬじと思ひ駭ぐ程よ、とり  
の時ばかりふあやしの網代車の、こころの人よもた  
ぢぬ様なるが人二三人ばかり供よて、此宮をさして  
たふ来ふくるよ、怪しうなりて、此檢非違使どもの具

長柄ふさしつけ  
車の棘ふさし寄  
り附くといふ

皆おりてふ、  
使ども馬より下り  
てさまは伊周を致  
ひた

同ト色の赤  
周も父の喪中なれ  
を尋びて服せり  
ひとく、い裏なきを  
つひ夏のみあれは  
くさく貫くく

の赤ぎぬなど着たる者ども、唯よりよ寄りて、なよの  
車ぞ。唯今かゝる所に來るはとて、長柄ふさしつけば、  
あらずや。殿の木幡よ参らせ給つりしが、今歸らせ給  
ふなりといふをきよて、此者ども皆去りぬ。御車御か  
どのもとよて昇きおろして、内大臣殿おりさせ給ひぬ。  
檢非違使ども皆おりて土に並居たり。見奉れば、御年  
ハ唯今廿二三ばかりありよて、御かたちとのほりふと  
り清げよ色あひ減よ白くめでたし。かれ光る源氏も  
かくや有りけんと思奉る。薄鈍の御ぞのわさうすら  
かなる、三ばかり同ト色の御單の御直衣指貫同じ様  
なり。御身のざえもかちも、此世の上達部よ、餘り  
給つりと聞ゆるぞかし。あさらものを哀れ悲しきわ

袴なり

帥本懐へ参られり  
りたるが云々  
これ拾便の録廷へ  
奏する詞なり

申なりぬ 卯の時  
の鼓鳴りなりと云  
當時の制陰陽寮に  
守辰丁とつあり  
て漏刻の節を伺ひ  
時不鼓とち刻ふ

ぎかなと見奉るゝ涙も止め難くて皆泣きぬ。乗りなが  
らもいらせ給はで、宮定子のおもしませば、我ひとりハ猶  
畏まり給へるもいと悲しきてれをしぬまバ、帥伊周本懐  
に参られたりけるが、只今おむ歸りて候ふと奏せさ  
まをバ、むげよ夜よりぬまバ、今宵は能くまもりて  
あま卯の時ふとある宣旨あま、夜一夜いもぬで立  
明したり。宮定子の御まへ母貴子北の方帥伊周どの、ひとつ又手を  
取かはして惑はせ給ふ。はかなくて夜も明ぬまバ、今  
日こそは限りと滄むく思すふ、立ちのうんとも思さ  
ず、御聲も惜ませ給はず。いかみく時なりぬと責めの  
おしるゝ、宮定子の御まへ母貴子北の方、つと捕へて更ふゆる  
し奉らせ給はずかゝるよしを奏せさまをバ、几帳とし

鐘をうちしなり

身のつづらふ云  
云 拾便の身のか  
ひなく役目もいた  
づらふなりてハ不  
都合なるべしのま  
なり

御ごき、合あきとか  
く食く花はなのさる袋  
ともと摩まの餌袋えよ  
り持つて大おくは  
人ひとの果物くだものなどを入  
て、さうさふなり  
筵張しんちやうの車くるま、おんんか  
どをのまる、おんんの

小宮定子の御まへを引放ち奉ると宣旨頻れと、檢けん飛ひ違違使  
ども、人なればおをします屋よ、えもいはぬ者共  
のぼり立ちて、塗籠をわりのしるだよ、いみじきを  
又いかでか宮の御前の御手をひき放つや、あらん  
と、いと怖しう思ひまはして、身檢使詞のいたづら又羅りな  
りて後ハ、いと便なかるぞし。とくくとせめ申せを、す  
ぢなくて出でさせ給ふ、松道雅君いみじう慕ひ聞えさ  
せ給へバ、かしく構へてゐて隠し奉りて、御車又柑  
子橋御ごき一つばかり御ご袋ふくろ入いまき、筵張しんちやうの車くるまふ  
乗せ給ふ。宮定子のおはしますをいとかたじけなく思せ  
ど、宮の御前母貴子北の方も續き立ち給へまバ、近う御車  
寄せて乗らせ給ふ、母北の方やがて御腰を抱きて

車なり之をまぐぬ  
りたるハ表すの料  
あり

御鉄と云、き  
時ハそぎ尼とて髪  
の末をきりそぐま  
でよてはが刺る  
るハなし故不鉄  
てとちなるなり

續きて乗らせ給へば母北方帥の袖をつと捕へて乗ら  
んと侍りと奏せさまをばいと便なき事なり。引放ちて  
とあまご、難を給ふべきかた見えぬ。たゞ山崎までいりむ  
いりむと唯乗りよのり給へいりむはせん。まぢなきて御  
車引出しつ。長徳二年四月廿四日なりけり。帥殿ハ筑紫北  
方なれば未申の方におはしまし、中納言殿ハ出雲の方にお  
は丹波の方北道よりとて。成亥さまにおはする御車にも引  
出づる儘、宮ハ御鉄して御手づから尼おならせ給ひぬ。  
内より此人伊周ヤ隆家まかりぬ。宮ハ尼おならせ給ひぬと奏せられ  
あまご宮ハ唯よもおとしまさらんふものをかく思は  
せ奉る事と思し續一條帝ノけて涙こぼれさせ給へば忍びさ  
せ給ふ。昔の長恨歌の物語なりともやうなるるなりやと

長恨歌の物語 唐  
の玄宗帝の揚貴妃

おろくれたる 姑未  
をる奈天の面白く  
作りたるから歌不  
て白氏文集あり  
悲しき事ハ宜しき  
也 唯悲しといふ  
ハ宜しき時の事か  
りこれハ何ともい  
へんやうなしと云

大江山 丹波と丹  
後との國境あり

悲しう思さる事限りなし。此殿ばらのおはするをせ給  
くくの見るさま少くの物見よいまさりたり。見る人涙  
を流したり。哀又悲しき事ハ宜しき事也けり。中納言殿  
ハ京出ではて給ひて丹波さかひみて御馬お乗らせ給  
ひぬ。御車ハ返し遣はすとて、年ごろ仕え給ひける牛飼  
わらはは、此牛ハ我形見又見よとて給へばわらはは伏し  
まろびて泣くさまことわりふいと。御車ハ都まき御身  
ハ知らぬ山路へ入らせ給ふほどぞいとどき。大江山と  
いふ所りて、中納言隆家宮ハ御文書らせ給ふ。こゝ迄ハ平  
らうまあうで来つきて侍るがひなき身なりとも、今  
一度参りて御覽せらまて、やみ侍りなんと思ひ給ふ  
るよなるむ、いみじう苦しう侍る。御有様ゆかしきなり。

消息詞



と哀<sup>い</sup>書續け給ひく。

憂きことをおほえの山と知りながら、いとゞ深く  
もいる我身りた。となむ思給へらま侍るなど書給へ  
り。<sup>定子</sup>宮より哀<sup>い</sup>悲<sup>い</sup>うらろづを思し惑はせ給ひても

のも覚えさせ給はず。唯ならぬ御有様ふ、かくさへ成  
らせ給ひぬる事とらへ<sup>い</sup>まぐ内<sup>い</sup>も<sup>い</sup>女院<sup>い</sup>もいみト

く聞<sup>い</sup>ゑ<sup>い</sup>おぼす。<sup>伊周</sup>そち殿は其日のうち、山崎関戸  
の院といふ所ぞ留まらせ給へる。此御供よりハさる

べき檢非違使ども四人ぞ仕うまつりたりける。其具  
の者どもの御車に附て参るぞ哀<sup>い</sup>ゆ<sup>い</sup>き。<sup>隆家</sup>中納言  
の御供より、左衛門尉延安といふ人ハ、長谷の僧都<sup>隆修</sup>の  
えらからの檢非違使なり。それぞ仕うまつりたりけ

うきことおほえの  
山 大江ふきこと  
かけく

吟<sup>い</sup>な<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>者<sup>い</sup>様<sup>い</sup>ふ  
云<sup>い</sup>、市<sup>い</sup>懐<sup>い</sup>胎<sup>い</sup>中<sup>い</sup>な  
る<sup>い</sup>又<sup>い</sup>尼<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら  
せ<sup>い</sup>給<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>を<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ふ

山崎<sup>い</sup>関<sup>い</sup>戸<sup>い</sup>の<sup>い</sup>院<sup>い</sup>  
山崎<sup>い</sup>関<sup>い</sup>戸<sup>い</sup>の<sup>い</sup>院<sup>い</sup>  
あり別<sup>い</sup>所<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら  
ぬ<sup>い</sup>を<sup>い</sup>例<sup>い</sup>と<sup>い</sup>す

右<sup>い</sup>衛<sup>い</sup>門<sup>い</sup>尉<sup>い</sup>延<sup>い</sup>安<sup>い</sup> 檢<sup>い</sup>  
非<sup>い</sup>違<sup>い</sup>使<sup>い</sup>少<sup>い</sup>尉<sup>い</sup>と<sup>い</sup>大<sup>い</sup>  
左<sup>い</sup>衛<sup>い</sup>門<sup>い</sup>尉<sup>い</sup>と<sup>い</sup>兼<sup>い</sup>  
ぬ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>を<sup>い</sup>例<sup>い</sup>と<sup>い</sup>す

其心ちつくろひや  
めて病ひを治め  
止むるをいふ  
速おほけきま  
けそりけの音通  
て引別けきれのま  
ならん

はる宜一かるづく  
云く 山院をおどしきり  
しより起りたるふ  
れは先づ院を申さ  
ごめきなり

る。浅まき事盡せず。開戸の院にて帥殿伊周ハ御心ちあ  
しうなりふけきバ、御供の檢非違使ごも、かうく帥ハ  
みどりごちあーとそためらひ候ふ。母北の方もや  
がてつと捕へて、まだ爰なんと奏すれバとく其  
心ちつくろひやめて、すくやか下すべきよし、母北  
のかと速まあけ奉ると宣旨ある、中納言隆家宮の御有  
様も思しやり、かの母北貴子の方をも思しやらせ給ふ  
いみどくて、女院詮子も内一條も遙なる御有様を、いと心苦  
しう思しめして、大道長殿も猶このる宜一かるづくな  
ど院花山せちま申させ給ひて、帥殿伊周ハ播磨隆家中納言殿  
ハ但馬定子不留まり給ふべき宣旨下りぬ。此事を宮人づ  
て不聞させ給ひて、いみどう嬉しなどもおろろ思召

あけきならせ給ひ  
これもこけりも  
一に上げておけ  
のがまるきあらん

さくりもよふあり  
和名抄不職喧  
判とありいさま  
毎まのつまると  
いふよ、ハ泣く  
なり

さるも、哀ふいみじき御事ども也かし。開戸の院  
て播磨とままり給ふべき不成りぬまバ、いみどう嬉  
しう思されて、さは早う都へ歸らせ給ひね。こよなう  
近き程隆家羅り留まりぬまバ、いと嬉しう侍り。又あや  
まちたる事侍らねバ、さりととも召還さる、やうも侍  
りあんなど、なかく聞え慰めさせ給ひてあけ奉らせ給  
ひ、我ハ播磨へおはす。かたみま遠ざからせ給へバ、い  
みじう悲しうなども世の常なり。さて歸らせ給ひて、  
う貴子ハ宮の御有様の變らせ給へるよ、又いと定子き  
御涙さくりもよふなり。帥殿伊周ハ播磨におはすとてこ  
こは明石となむ申まといふを聞きめして、  
物思ふ心のやみしくらけきバ、あかしの浦もかひ

もの、おぼゆるふ  
やうく述懐の歌  
も日か物思ひふよ  
りてよまるよや  
となり

あら浪云、は  
あはれをいふ  
ふもあはれ人丸と  
あり

さもこそは都  
はらう後拾遺集  
旅の部

あうりけり。いでや物のおほゆるよやと、我御心よも  
憎く思さるべし。中納言殿こと方へおほすらんを、な  
どか同一方ふだよあらましかば、何事もよからま  
よ、あやまくなる世を心憂く思さきて、  
あら浪いたてどころもよかさならず。明石もすま  
もおのぐらうらふといふふる歌をかへさせ給へるな  
るぞし。

かろくよ別る身よも似たるかな。明石もすまも  
おのぐらうらふとぞ思されける。中納言殿ハ旅の宿り  
の、露けく思されければ、  
さもこそは都のわらう旅寝せめ。うたてつゆけき  
くさまくらかな。かくて但馬ふおはし着きぬま、國

國の守る家の志  
めより云、但馬  
守平吉昌を曾て隆  
家の姉君の御子  
中宮の権左衛門あり  
しる枕草子の首を  
みもよえたり其思  
を思ひて隆家と尊  
らまらなるん

いと遠かりつるは  
供ふ云、遠き所  
まで出仕あはる者  
ハ無縁の他人も  
もよまらば嬉しく  
おもふふし  
宮のほろま、あ  
産の期の近づきた  
るをいふ  
たのもしくおぼま

平生冒  
の守公家の御定より外よ、さし進み仕うまつる事多  
かり。中納言殿ハ心の愛ぎやうつき給へま、誰もい  
みとらうぞ仕うまつりける。おそし着ぬま、延安都へ  
かへり参るふ、いと心細げなる御有様の心苦しさ  
ふ、わが子を供よるていきたりける友助といふを留  
めて、御心不随へといひ置きて、我ハのほりよけり播  
磨も有るべき様よ志つらひす忍奉り置きて、御供  
の檢非違使ども還り参りぬ。いと遠なりつる程の御  
供よ、よそくの人も哀れよ嬉しく思ふめり。松君の意  
聞え給ふぞいみじう哀れなりける。  
九月十日の程ふ成りぬま、宮の御事やうく近く成  
りぬるま、たのもしく思す人の、沈み入り給へるよ、い

人の云く 中宮を  
軽もき方と云ふ  
是母君の伊周を別  
れて後病の床にお  
し沈み入り給ふを  
心細く思さるる事  
り

秋の鶴みやこのう  
ちふ云く 此秋酒  
花集難上ふあり又  
やこのうちハ秋の  
中と身や筑物のち  
とをかけし事

やさしからむ 恥  
かしらむと云ふ

と心細く思さる事盡せずなむ。此御心ちの有様  
おこさり給はん事ありがたげなるまた朝ゆふハ  
あな恋しより外の事を宣はゞこそあらめ。是を聞給  
ふまゝに、但馬も播磨もいみどう思しおこす。母  
北貴子の方うちなき給ひく、

よるの鶴みやこのうち又籠められて、子をこひつ  
つもなきあかすかないかもと人々聞ゆれば、あらず  
といひ終らはし給へり。播磨もハ此貴子うへの戀しと思  
したらんふ、いかで見奉るべからん。親の御事をいみ  
ととて、又身のいみどう成果ん事と思し亂る。但馬も  
はいみじき親の御事ありとも。いかでか又聞きよく  
き事い志いてん。人の思もん所やさしからむと思し絶

小周

えり

はうたなく秋も成りぬまば、世の中いと衰え、秋吹  
く風の音も遠き程のけはひのそよめきよ、思しよそ  
へられけり。播磨よりも但馬よりも、日くよ人まゐり  
通ふ。北貴子の方御心ち彌増り重りよけまば、こと事なし。  
帥伊周殿今一度見奉りて死なんくといふ事を寝ても覺  
めても宣へば、宮定子の御前もいみじう心苦しき事と思  
しめし、此御をらうらのぬし達もいかなるべき事よか  
と思ひ廻はせど、猶いと怖ろし。北貴子の方はせちよ泣き  
戀ひ奉り給ふ。見聞き奉る人も安からず思ひ聞え  
たり。播磨もハかくと聞給ひく。いかよすべき事よか  
あらん。事の聞えあらば我身こそはいふくふようの

予のきこえあらハ  
云く 伊周の思ふ

やうハ我身ひそく  
小上京まともき  
其風雨あつぱい  
い罪おもくなり  
て永く赦免の沙汰  
もあつて涯つひ  
おとせぬして止  
むならむと  
さむせはつて  
さゆらるる  
いつ政路とも定ま  
らぬ方のつと  
のまきやうあらじ  
と思ひかへま  
積さるべきなり  
佛縁の増みも加  
らうて罪おもく  
らばそれもおも  
き宿縁あつと  
此心の方かやうの  
怨と云く 殊交不  
思願をのけ置  
ハ昔の赤心をへの

物に成果て、都を見でやみなめ。なごよろづと思  
續けて、唯とよかく御涙のみぞひまなきや。さばさ  
此身いまさといひならんとする。是にまさるや  
はと思ひなりて、親の限りとおはせんを見奉りたり  
とておほやけもいと罪せさせ給ひ、神佛も憎ませ  
給はゞ、猶さるべきなめりとこそは思はめと思し立  
ちて、夜を晝まで上り給ふ。さて宮の内定子居給は事の聞え  
有るべけき、この西の京小西院といふ處、いみじ  
う忍びて夜中におをしたれば、貴子へも宮もいと忍び  
く、そこにおをましあひたり。かの西院も道隆殿のおは  
しま志、をり此北貴子の方の、かやうの處をわざと尋ね  
かへりさせ給ひしかば、其をりの御心ばへども不

忝むけさみ對し  
て漏らさまじき所  
ぞと  
まう今さらのそく  
一本今ハさい  
この市對面より  
いづつてまき

思ひて、洩すまじき所を思しよりたりけり。母北貴子の方  
も宮定子の御前も、御方伊周も見奉りかはさせ給ひて、  
また今さらの御對面の歡びの涙も、いとおどろく志  
りいみじ貴子うへハかこく御車に乗せ奉りて、おまし  
なづらぞ搔おろし奉りける。いと不覺となり、ける  
御心ち也けれど、ろづさこがしうなしく聞え給ひ  
て、今ハ心安く死も志侍るべきかなと歡び聞え給ふ  
も、いへばおろし又哀と悲しとも世の常なりや。かく  
て一二日おぼろげならず忍びさせ給ふ、いかなる  
もの罪より。おほやけ私伊周殿上り給へりといふ事  
出きて、宮定子をもまぼらせ給ひ、さるべく疑がはしき所  
をもうかゝらせ給ふ、すべてつゆけしきなければ、



おほやけおほやけふささき  
さきさきさきさきあまふ  
り公然と御延の赦  
免をば帰後せし  
るゝあれあれとああ私  
ふ上系上系せし御御  
とと

まへて都の近き  
云く 播磨播磨と云  
まの道程近けれ  
ばこそたやまやま上  
りもまれとと

衆を盡盡ふなしておほやけの御使播磨下りておほしおは  
せず慥慥として見せよ遣遣したれがげよおはせさり  
けり。さるべく疑がはしき所所を尋ねさせ給ふよ唯  
西院西院なむ籠りておはするとの事聞えたればお  
ほやけおほやけふ皆さきさきかゝる事あるとなれどまだか  
く私私より来るなましなし。これ唯の事事はあらじ。公  
家をいかよ志奉らんとする事を構へたるぞといひ  
トき事を推量らせ給ふも怖ろしくてずべて都の近  
きがする事なりとて、又くもかくぞあらんとて、此た  
びびいまことの筑紫へとて、檢非違使檢非違使ども送り奉るべ  
き宣旨宣旨くだりぬ。打圍打圍みてとくといさゝり遁れ給  
ふべくもあらず、そのかし聞ゆ。又更なる御氣色御氣色と

宣旨宣旨申し決ぎを  
職とる女官女官の務  
なり

とつりともかり  
とも 所詮所詮母君ハ  
存命存命おつらなれ  
とと

もいへばおろろよゆゝ。此度の御供貴子よも母北貴子の方  
の御はらうらの津の守守為基といひし人のめりて、宣旨  
とてありし御車御車もてやがて参る。母北の方方あきれて  
やがて物も覺え給はず。帥帥殿殿ハ何か是ハことわりの  
事なれば、さるべきふこそはと、とろづ思思めして出  
でさせ給ふよ、松道雅君君ハ我もくと泣叫びのゝちり給ふ  
げよ哀哀よ悲悲しういみじ。かしこくこしらへ留め奉り  
て、御車御車引出づる程も哀哀よ悲悲し。淺ま淺ましう心憂く夢の  
やうなる事事もあらかたよと、盡盡きもせずおぼし歎歎か  
る。宮定子の御前の御心御心ちにも、播磨播磨とかはこよなく近  
と聞きつれば、頼貴子もしかりつるものを、とありともか  
りりとも、母北貴子の方はねえすべき御有様御有様もあらざ



るよしと

そのおふ云々此  
致玉系集卷四  
あり藤衣喪服  
あり

せ給ふ。筑紫の道ハ今十餘日といふもぞ冬り着きと  
りける。哀れ伊周さればふ。能くこそ見え奉りよけよと、今  
ぞ思されける。御服など奉るとて、

そのおふ着てましものを藤衣、やがてそれこそ別  
れなりけよ。とぞ獨ごち給ひける。かくて貴子への御事  
はあさましうてやませ給ひぬ。宮の御産定子の事も思し  
歎かよけり。十二月廿日の程ふ、日ざとも悩ませ給は  
で、女備子みこ生れさせ給へり。同じくは男不ねし、まさ  
ましかバ、いかふたのもしく嬉しからましと思すも  
のめら、又推返しいと嬉し。煩はしき世の中をとぞ思  
し召されける。内一條帝はけざやかふ奏せさせ給はねど  
おのづから院尊不聞し免しければ、同じう聞しめしつ。

侍湯殿ふハ  
殿の死とて空ま  
る儀ありとあり初  
香の奏ふくとし  
つゝま、  
中宮へ参るハ極り  
情むと世の極ふ  
れど帝の御世の畏  
こさふ参りし  
る限りあれハ云々  
中宮ありそれ程  
の分限あれハ一  
りあると云々儀ふ  
思えなけれと父君  
おもしろさま様さ  
ら免でたらんと  
あり

いとく哀よいかにせさせ給ふらんと、思し聞えさせ  
給ふ。女詮子院よりも様々又細か、推ばかり訪らひ聞え  
させ給へり。日ざと思し續けさせ給ふともなかりは  
きど、佛神の御たすけよやと見えさせ給ふ。御湯殿ふ  
は内一條よりの仰せ事よて、右近の内侍ぞ参りたる。いと  
つゝま、う怖ろしき世なるとも、一條への仰ごとのか  
しこさよ参りたるなりけり。事限りあれハ何事もあ  
べいさまはうせねど、故殿道隆などの御世の花々とあり  
しふ、かやうの御有様ならましうバ、いづかきめ  
たからまし。それを思し出でさせ給ふにもゆるしう  
思さる。お鈍色ほんぞの色より始めて、誰もうたてある御  
姿とも、若宮備子の物あえさせ給はず、志ろくうつく

始め云々 おんん  
その侍衆なり申宮  
も父君の忌中あれ  
ハ馬鈍の喪恨をぬ  
したるに尼の形ふ  
てさへあるをうた  
てお思ふよし物  
あえせずとも似さ  
るをいふ  
いふ一より云々  
昔も深き御公侍  
智為平親王を帝位  
おとあんとする由  
後言を構へられ  
りもつり御子お  
りて安心なりと思  
ふ

しうおとしませバ、右近の内侍、あゝ是をどく内<sup>一條</sup>  
御覧ぜさせ奉らばやと聞えさす。七日が程の御事ど  
も、いかゞおべてなるべき御事どもかは。但馬より聞  
給ひて、哀又嬉しき事かな。げ又男おとしませぬも  
いとよし。さらぬだよか、る世の中、いよりへもか  
やうの事によりてこそ、多く怖しき事は出来れなど  
いかゞはせん。の御心よや。女又おとしますも心安き  
事、不思しける。誰かこまやか又仕らまつるらんと、哀  
又思ひやり聞え給ふ。筑紫よは、うへの御事を哀又思  
やり聞え給ひ、宮<sup>定子</sup>の御事をもあけ暮心よかけ思しけ  
るよ、かくたひらかよおとしませすよしを聞えよ人参  
りたり。かくて右近の内侍七日が程過ぎて内又参れ

さまいみどり云  
云 衣服を弄種  
細なる賜りも  
のあつをいふ  
何をうと云々  
この詞を今俗の  
語小うつていへ  
バ何を他人あし  
ひなくは心配下  
されて賜抱いある  
あらむ帝いおねて  
右近をば先のおけ  
ぬ内縁の者と思  
し中宮お出ま  
せさせ給へるか  
ひなくは心配  
さまありてハ帝お  
對しまりて申日け  
なりとてかへも  
恐き入りたる由お  
り

は、<sup>中宮</sup>さまいみどり、細かなる事どもをせさせ給へれ  
バ、何を疎しとかくハ煩はしき事どもをせさせ給へ  
るならん。只右近をば睦まじうあなづらるしき方  
と、上<sup>一條</sup>の思しめしてせさせ給へるかひなく、いかで  
かくおどろくしき御事どもをば、問<sup>帝</sup>はせ給はんも  
奏すべきか、候はずなんあど啓して、かへもぐ畏ま  
りて、やがて内へ参りけまば、うへ忍びやうとさして  
日ごろの御有様細やか又問ハせ給ふよよろづさし  
ま一ついみどり哀り奏すまば、御涙もうかばせ給  
ひて、げよさぞあらんかしと思しめし續けさせ給ふ。  
若<sup>皇子</sup>宮の御うつくしきなど奏すまば、かれを見ればやな。  
皇子たち御たいめとて、いつくや七などよてぞ昔

又唯ももらま云  
云 髪をおろして  
尼の姿となり給へ  
るをいふうらやま  
し帝の心の裏か  
病ましう思ふま  
り羨むまよとあら  
ず

ついでちみき  
あん年正月元日の  
それ着おとして納め  
をどうと

そありける。また内又ちごなど入る事なかりけり。さ  
れど今の世はさもあらざめ。東宮居貞の宣耀殿小一条の宮な  
どは、つと抱きてこそありき給ふなれ。又唯もあら  
ずものし給ふとか。うらやましう思ふもあれど、あ  
ひ見んことこのいつとなきこそなど、哀よかさらはせ  
給ふ。右近詞いみじうさまぐよろづせさせ給へるこそ、いと  
かごとけなくのこく候へ。えもいはぬ装束して給  
はせたまふ、ついでちみきとてなん、をさえて候らふか  
ど奏す色ハ、帝詞あははへのおとなくしう、あまなる  
かこい海かまさらんなど、いみじう御心ざしある様  
と仰せらる。それ又つけても尼を寄せ給へる事を  
くちをしう参りなどせさせ給はんも、世の人の口

春やむらりの云々  
伊勢物語  
月やあらぬ春や  
むらりのまよとぬ  
我身ひとつとあら  
の身はいつとあら  
業平の歌ふうれり  
世の中ハ春の景色  
ふなりぬれど我身  
ハちしこのまよと  
と欲さおはま由か  
り  
及みまけて 終  
没けての略さ俗  
ふ多つばよ入ると  
いふよ同じ

煩らはしう思さる。程ぞ人知ぬ御歎きあまける。  
かくて年長徳三年丁酉も替りぬれば、ついでたちは朝拜など、て過  
きもてゆくは花の都はめでたきに定子、意かの旅の御有様  
ども、春や昔のとのみ思さまへく、哀まふ年さへ隔た  
りぬるをよろづいとおぼつかなく、あまたれ霞立ち  
るごとてたる心ちせさせ給ふ。  
二位此成忠 脩子若宮見奉りよとて、夜のほど参れり。定子宮の御前  
哀よ御墮とて、さくりもよと泣りせ給ふ。脩子宮のいみ  
じう字つくしうおそしますを、二位急みまけうつく  
しみ奉り給ふ。二位詞 貴子哀よりへの御かはりよは、御まへをこ  
そハ頼ままして候らふまへに、明暮もえ見奉らむ事  
をなん。さて内一條又ハ此宮脩子をいとゆかしきゆの小思

思ひやまらされ  
入内の事も自然に  
縁せらるるとなり

ひ聞えさせ給へば、入らせ給ふべしちどせりて申  
きめるを、いかゞ思し定めさせ給ふらん。老の身は  
さべき人も物をなん聞らせ侍らざりけると申給へ  
ば、定子詞こゝも母の御代りよ、いかでこそ思ひ聞え  
侍とど、其事となく物騒がしきうちよ、此宮の御あつ  
かひよ、はかなく明けられてこそ、一條帝うちよりも此宮を  
今までおぼつかなくてあらせ奉る事など、まめやら  
ふ宣はすめり。女院詮子も其御氣色は後はせ給ふよやあ  
らん。猶もて入り奉れとこそ、ハ宣はすもど、いざやよ  
ろづは、ましうのみ覚えてこそ、いかよせましと思  
ひやすらはれ侍れ。よろづよりもかの旅伊周 隆家の人を、い  
かみくと思ひものするこそ、いみじう哀よ心細けき。

はつふよりて云  
夢の吉兆あり  
しるは疾く来内  
たまへしと云めや  
んと思ひ給ふりてま  
りたりと云

さりともいとかくてやむべうハ、いかでかとのみこ  
そハ、内藤いみどり心苦しき事、成忠詞ふ宣はすなむなど  
宣はすんば、成忠詞なむく夢よ召しかへさるべきさま、小見  
給ふるよ、かく今まで音なく侍るをなむ。猶さるべう  
思したちて、内ふ参らせ給へ。御祈をいみどり仕りま  
つりて寝て侍りし夢よこそ、男宮ハ生を給はんと思  
ふ夢見て侍しかば、此事よよりて、猶とく参らせ給へ  
と、そののこし啓せんと思ひ給へらとてなむ多く、参  
り侍りつるなる。御文にてハおち散るやうもやと、思  
ふ給へてなむふどそのかし、泣きさみ笑ひみ夜ひや  
教御物語ありて、曉にハ歸り給ひぬ。定子宮の御前の御内参  
りの子、三位そののこし啓しつるよぞ、思し立とせ給へる。

まづあもものみ云  
古今集下  
小遣人あらば  
世の中のうきも  
つらきも昔仲あく  
おまつ知るものハ  
涙こたけとある秋  
ふふれり

いとけ速く云く  
中宮ハ既お飾り

かくて定子冬らせ給へば、女院皇子いつしかと若宮皇子を懐き奉  
らせ給へば、いとつくりつくりおはします。うちえきて  
哀れ見奉らせ給ふ。いとをかしげと肥えさせ給へり。  
御物語何となくものはなやかと申させ給へば、まづ  
あるものお思さるべし。宮定子よろづみつゝまじき事を  
思しめす。院東三條と御對面ありて、盡せぬ御物語を申さ  
せ給ふほどふらへ渡らせ給ひて、若宮皇子見奉らせ給ふ。  
えもいはずうつくしうおもしろくして、たゞ笑ひよこ  
らひ物語りせさせ給ふ。うへの御前今まで見ざりけ  
るよと思しめす。まづ御涙もるかばせ給ふべし。ま  
して男とおもしろくまじかばとぞ、人知れず思しめし  
ける。さて宮定子お御對面あると、御几帳引寄せて、いとけ

と招りて尾お成  
り給へばん

行立かへりあ心ち  
の云く 古今集  
はお紀女お之  
かへり心かたえし  
きりお物おはれせ  
でとつ。秋の意お  
てま上の昔おく  
思しめるを宮おに  
お併門ふ入り給へ  
と思し絶たさる由  
なり  
職の御曹司中宮  
職として中宮の庶務  
を司る役所の部屋  
なり

遠くもておし聞え給へる程もことろりなれど、御と  
なふら遠く取りなして、隔てなき様まで泣きみ笑ひ  
み聞えさせ給ふ。いよゝに猶立歸る御心ちの出  
でくれハ、宮定子いとくけからぬ事なりなるともろづと  
申させ給へど、それをも聞しめしけれぬさまと、亂れ  
させ給ふ程もかたはら痛げなり。よろづと語らひ聞  
え給ひて、曉ふ出でさせ給ふべしと、猶志ばし宮見  
つくさで、いま四五日はと申させ給ひて、職の御曹司  
お曉よわとらせ給ひて、そこと暫しおとします。すべく  
志つらはせ給ふ。うへも宮もよろづと思しめし憚か  
らせ給ふ事多くおはしませど、ひたみちと唯哀れ戀  
しう思ひ聞えさせ給へる程なれば、人の誹らんも知

御方の女房たち云  
云 中宮御方の女  
房たちハ共中宮中  
御公せしむを公ひ  
出づる

三月をくりみぞ云  
云 これハ中宮志

らぬ様ももてなり聞えさせ給ふも此かこハすぢあ  
き事こそそあめれ宮の御前ハ世のかこもら痛きを  
さへ物歎きよ添へて思召す御方の女房たち昔覺え  
て哀ふ思へりさて目ごろおはしましめて猶いと程遠  
しとて近き殿又渡し奉りてのぼらせ給ふ事はなく  
てわきおとしまして夜なかばかりまでおはしまし  
て後夜よぞ歸らせ給ひける御心ざし昔ふこふなげ  
なり。

長徳四年ふなりぬ若宮三は成給ひぬいかよいと  
うつくしうと思ひやり聞えさせ給ふもいと戀し  
うまめやかよ思へ出るをりく多かるべし中宮よハ  
三月ばかりよぞ御子生れ給ふべき程なれば御慎み

むし宮中ふありし  
るふ又中宮志の  
きをありて今年三  
月の程中宮の期ふ  
あくる  
御封などす  
うも云ハ 御封と  
ハ中宮山領の封ア  
ふりまはつべきの  
みと心おてあるべ  
し  
こほりなくと云ふ  
一岡し  
此但馬守の  
生白のみハ舊恩  
と云れは  
つし

をよろづふ思せど殊は御封などすがく去りよきま  
へ申せ人なし内藏つかさより例のさまぐの御具な  
どもて運び女院などよりもよろづ思しはかり聞え  
させ給へばそれよてぞ何事もいそがせ給ふ僧都の  
君もよろづ小頼も一う仕うまつり給ふいかふくと  
思へ渡る程は御氣色ありさとの志り駭ぐ程ふ  
哀小頼も一き方なし唯この但馬守をよろづ頼もし  
う仕うまつる二位もかくと聞奉りて居ながら顔を  
突き祈り申すいみじき御願の驗しよやいとたひら  
かよ男御子生れ給ひぬ男おとしませばいとゆ  
一きまで思されながら女院は御消息あきばうへよ  
奏せさせ給ひて御はかしもて冬るいと嬉しき事に



ものよそあつてせ  
給ふ 娘一き餘り  
小物ふゆきある  
程なるをいふ

はら子のあつしお  
云く 皇子の遊生  
のまじりよつき流人  
とよる返へさんと  
思しめしては由道  
長も活り出給へ

誰もたれも思しめさる。世の中いかくこそありけむ。  
望めどのぞまされず。道るれどのがれずと云ふはげみ  
人の御幸ひよこそと聞憎きまで世のあり申は  
かくいふ程伊筑紫周聞給ひてあさましう嬉しうて  
ものよそあたらせ給ふ。我佛の御徳よ、それらも召さ  
れぬべかめりと、いみじく嬉しう思しめされて、此御  
事の後よりは、さゝ行末のあらまし事のみ思し續け  
られて、御心のうちふいとたのもしく思さるべし。か  
ゝる程教康に今宮の御事のいたはしければ、いとやごと  
なく思さる一條まゝ、いかに今ハ此御事のあつしよ  
旅の人をとのみ思しめして、常齋子女院一條と上の御前と  
かたらひ聞えさせ給ひて、道長殿もかやうよまねび聞

るなり

例の裳瘡うしろあ  
らま云く もがさ  
ハ瘡瘡かり赤き瘡  
とハ麻疹なるべし  
いこつらふなる  
ハ死亡せらるなり  
日本紀略長徳四年  
の条、夏年自夏  
冬瘡瘡遍發六七月  
間京師男女死者甚  
多云、世謂之赤斑  
瘡始自天皇乙未年  
人貴賤老少備素男  
女無一免此瘡者云  
云と見えたり

えさせ給へば、げよ御子の御志るし侍らんこそはよ  
からめ。今いめし遣いさせ給へか、など奏し給へ  
ば、一條いみじう嬉しう思しめながら、さるべき様  
よ、ともかくもとのどやかと仰せらる。四月長徳四よぞ今は  
召返すよしの宣旨下りける。それは今年例の裳瘡よ  
ハあらずいと赤き瘡のこまりなる出きて老たる若  
き上下わかずこれをやみのこりて、やがていたづ  
らふなる類ひもあるべし。是をねほやけよとく、今  
の物歎きにして志づ心なし。されど此召返しの宣旨  
下りぬれば、定子宮の御前世嬉しき事よ思さるべし。夜  
を晝よなして、おんやけの御使をも知らず。まづ宮の  
御使ども参る。是よつけても教康若宮の御とくと、世の人



浅茅生とあきよけれども古さとのまつは木だか  
くありふけるかな。又との、

こしかたのいきの松原いきてきて、ふるきみやこ  
を見るぞかなしき。と宣へば伊周室

いきの松原 筑前  
國早良郡生松原  
とある名所あり  
こしかたの松原  
ありし程をいふ  
らむ

そのかみのいきの松ばらいきて見て、みながらあ  
らぬ心地せしかな。とのたまふ。まづ宮へ参らむとて  
急ぎ出でさせ給ふも、女君涙こぼれさせ給ふ。宮の  
御前ひとへの御ぞの袖も、志ぼるばかりにておはし  
ます。何事ものぞかなむあど申させ給ふ。宮達さま  
ざまふいみじくうつくしうれをしますを、一の宮を

女君涙こぼれ給ふ  
かりそめの別れ  
も程時の思ひ  
ては給ふ

まづいづき奉らまほしげと思せど、いまく志りのみ  
もの覚え侍りてと、聞えさせ給ふほども、猶いと世

いましう云々  
院餘の身なれども  
むきさうとあつれ  
てと

ひつ涙の云々  
後選集  
うれきもらき  
も心いひとら  
まのぬものハ涙  
こなりとあつれ  
と

い定め難し。たひらかき後も御命をたもたせ給ふこ  
そ、世不愛たき事なりけれとのみぞ見えさせ給ふ。故  
う貴子への御事をかへむく聞えさせ給ひつ、誰もいみ  
じう泣らせ給ふ。とらづとひとつ涙のといふやう  
見えさせ給ふも、哀に盡せずぞ見えさせ給ふ。其頃  
き日して、故北貴子の方の御墓を拜み、帥殿伊周中納言殿も  
ろとも、櫻本を参らせ給ふ。哀と悲しう思されて、お  
はせましかばと思さるゝも、涙は濁れ給ふ。をりし  
も雪いみじくふる。中納言隆家、  
露ばかりにほひとめてありふける、さくらがも  
とを見るぞかあしき。帥殿伊周、  
櫻もとある淡雪を花とみて、をるも袖ぞぬれま

さりけり。よろづ哀も聞えおきてなしく歸らせ給ふ。  
いかで今は其所に御堂建させんとぞ思しおきてけ  
る。

⑥ かゞやく藤壺

かゞやく藤壺つが  
は春をかくなづけ  
道長の女入内  
とてあつば居さ  
せ給へるが由度  
より始りて先りか  
ゞやくゆをかける  
よよりてなり  
侍裳着 女の童  
み裳を着せむる  
式なり男の袴着  
似たり  
初雪の物語の云々  
これに故も借ら  
らねどは世に  
たし作り物語お  
りたり

道長 大殿の姫君十二ふならせ給へば、年の内小御裳着あ  
りて、やがて内一攝に参らせ給ひむといそがせ給ふ。よろ  
づ志つくさせ給へり。女房の有様ども、かの初雪の物  
語の女御殿に参りこみし人々よりも是はめでとし。  
御屏風より始めなべてならぬさまふ志つくさせ給  
ひて、さるべき人々やむごとなき所く小歌よませ給  
ふ。歌ハ主がらなんをかしさハ勝るといふらむやう  
ふ。道長 大殿やがてよみ給ひ又花山院よませ給ふ。又四條

の公任の宰相かど詠ま給へる藤咲くる所に、

むらさきの雲とぞ  
云々 秋後遠集  
ふ裁せり葉雲ハ  
もてこきたりしお  
りけり

むらさきの雲とぞみゆる藤のはやいりたる宿の  
あるじたるらん。又人の家よりひささき鶴ども多くか  
ひたる所花山院

ひなづるを云々  
雛鶴を靴子と松を  
こころふとそ(一)年  
りしなむ

ひなづるをやしなひたて、松がえのかげますまさ  
む事をしぞ思ふ。とぞある。多かれどかたをしをそ  
書らずなりぬ。かくて参らせ給ふ事長保元年十一月  
一日の事なり。女房四十人、童六人、下づかへ六人なり。  
いみどうえりとのへさせ給へるよ、やむごとあき  
をば更もいはず。四位五位のむすめといへど殊も  
交らひわろくたういでたち清げならぬをばあへて  
仕らまつらせ給ふべきもあらず。もの清らかよふ

院人内人云く院人ハ女院より附けらる内人ハ内裏より宮人より湯屋よりよきと送みて附けらる侍女もて教人といふぞ遠世の家のもともりの侍女なるべき

りいでよきをとえらせ給へり。さべき童あどハ女院金子よりなど奉らせ給へり。これハやがて此たびのヨラその名とも院人内人宮人殿人などやう又つけ集めさせ給へり。姫君彰子の御有様さらなるまなれど御くしたけ又五六寸ばかり餘らせ給へり。御かこち聞えさせん方なくをかしげ又おはします。またいと雅なるべき程ふいさ、りいはけたる所なくいへばおるかふめでたくおろします。見奉り仕うまつる人も餘り若く御坐ますをいか小物のはえかくやなど思ひ聞えさせよかど、浅ましきまでおとなびさせ給へり。よろづ珍らかなるまでよて参らせ給ふ。昔の人の有様を今聞合するよ、いとぞものぐるほ、其折

女侍后の馬方かど云く昔の女御たちハ衣少まけきバ、どてかみて今とくら、思ふ彰子の有様のか、いよ、ま、あ、の、ま、り、う、む、け、ぬ、い、云、く、は、む、帝、ハ、二、十、オ、み、あ、ら、せ、給、ふ、之、ね、お、と、八、年、の、み、け、ら、る、ま、り、

の人れきぬ少なる綿薄くて、めでとき折節もも出交らん、内くももいかでありへたらんと覺えたり。此頃の人ハ、うたて情けなきまで着重ねても、猶こそハ風などもおくるめれ。されば古くへの人れ女御后の御方くなど、思ふやうよかたは、有らずやと見えり。かくて参らせ給へるふ、むげ又ねびもの、こころ知らせ給へれば、いと物のほえもあり、また恥かしうもおろします。中宮定子の参らせ給へりし程など、ハ、くもいと若くねを、是ハさらなる事ながら、おほん心おきて御氣色あど、すべて末の世の帝ハ、あまらせ給へり。とまでぞ、世の人やむとなき君よおろしますと、時のおと、公卿も申聞えさせけ

いまめうしうあ  
世風よといふこと

ほそ殿 中宮の  
殿ふかふふ廊めく  
ひなう

螺てん 青見を入  
きて塗りたるとい

榮花物語

る。故<sup>道隆</sup>開白殿の御有様ハ、いと物花やかよいまめかし  
う、あいぎやうつきて、けぢうらぞありしう、中宮<sup>定子</sup>の御  
方ハ、殿上人も細殿常<sup>元子</sup>はゆかしう、あらまほしげよぞ思  
ひたりし。弘徽殿<sup>義子</sup>承香殿<sup>元子</sup>倉部<sup>尊子</sup>屋など参りこませ給へ  
り。されどさるべき御子たちもいでおもしまさで、中  
宮<sup>定子</sup>のみこそハ、かくて御子たちあまたおはしますめ  
也。此御<sup>彰子</sup>方藤壺に御坐ますふ御志つらひも玉も少し  
磨きこるハ、光のどらなるやうもあり。こそハ照り輝  
きて、女房もせうくの人の、御前の方ふ参り仕うまつ  
るべきやうも見えず。いとみとらあさましう、さま  
異なるまで志つらとせ給へり。御几帳御屏風のよそ  
ひまで、皆蔭繪螺鈿をせさせ給へり。女房ハ同トき大

ふ  
大海のまわりも 白  
地ふま海波目水草  
ケもの形をまいた  
る裳をうすぎぬ  
はうす着の上ふら  
さぬる短衣あて婦  
人の乳服なり  
余婦藏人云々 命  
婦ハさまご、あたら  
ぬ女友の名流人の  
女流人なるべし  
陣の吉上とて海潮  
陣の属官ハ刀自など  
老女の称なり

海のすりも織物の唐きぬなど昔より今も同トやう  
なまきども是はいかよ志するぞとまで見えし里<sup>彰子</sup>女御  
のはかなく奉りたる御その色、薰りなど、世よめで  
たき、ぬめしよ志つべき御事なる。御殿居頻りなり。よ  
き日して御めのとよりはじめ、命婦藏人陣の吉上衛  
士まで、贈り物を給はすれば、年老たる女官刀自など  
ふいたるまで、世よいひ知らぬまで御祈りを申し禱  
り奉る。御めのとたちさべき衣綾織物の装束ども、数  
多く重ねさせ給ひて、衣箱よ包ませ給ひく様くの物  
ども漆へさせ給へり。此御<sup>彰子</sup>方よ召仕はせ給はぬ人を  
バせよ辱けなく畏こまりをなし、世よそらろはしく  
いひ思へり。たましく召仕はせ給ふをバ、世よめでたく

榮花物語

かの宮云く 三條  
の大臣の宮までハ  
のまゝ

羨ましく思ひて、幸もひ人とぞつけたる。唯今内わこ  
り花ととめでたくいみじきよ、三條の大臣のみやハ、  
此つ長保元年十月ひたちの目失させ給ひ年五十しかバ、それをかの宮  
よハ哀れと悲しき物と思ふべし。世の定なさのみぞ  
よろづと思ひ知られける。うへ一條藤壺小渡らせ給へれ  
バ、御志つらひ有様ハさもこそあらめ。女御の御有様  
もてなしあはれふ、めでたくおぼし見奉らせ給ふ。姫  
宮をかやうとおぼしたて奉らばやと思しめさるべ  
し。こと御方々皆ねびとくのほらせ給ひ、およすけさ  
せ給へるバ、只今此御方彰子をば、日が御姫宮をかしづき  
す忍奉らせ給へらんやうよぞ御覧せられける。年ご  
ろの御目うつり壁へなく、おはれよらうたく見奉ら

およませ 老成  
るをりふ

かゝるま かしゆ  
と公重りの立つを  
いふり枕草子にお  
せの香をこしか、  
へたる云くと見え  
ゆ

せ給ふべし。打橋渡らせ給ふよりして、此御方のには  
ひい、唯今あるそら薰物ならねば、若ハ何くまの香の  
かよこそあんなきなどもかゝえす。何ともなく志み  
薰りわさらせ給ひくの御うつり香は、こと御方々  
似ず思さまけり。はらなき御極の箱、硯のはこのうち  
よりして、ちかしう珍らかなる物どもの有様ハ、御覧  
じつかせ給ひく、おくれをまづ日よらせ給ひて、御厨  
子など御覧ずるふ、いづまか御目とまらぬもの、  
あらん。弘高が哥繪かきたる雙紙、又行成の君哥かき  
たるなど、いみじうをかしう御覧せらる。餘り物けう  
ドする程よ、むげふまつりごと知らぬ志れものよこそ  
なりぬべかめれなど、仰せらるつゝぞ帰らせ給ひけ

弘高 巨勢金園が  
曾孫ふみえたる  
繪の妙ありこれ  
ら譽れの物語著  
り集金首物語な  
どももええり  
行成ハ世尊寺家  
筆道の組よて終

書のゆゑあふ人の  
の知る所なり

る。晝まわらば御殿ごもりて、餘り雅なき御有様な  
れば、<sup>帝詞</sup>参りしれば公箱とおぼえそ、それ恥かしくぞなど  
宣へする程も、唯今ぞせばかりふれをしますます。同  
しこのどく申しながら、いかゞや片なり、飽ぬ  
所もおとしますものを、<sup>一條</sup>此うへいこじう御かたち  
より始め、清らに浅ましきまでおとします。大みき  
などい少しきこし召しけり。御笛をえもいはず吹き  
すまさせ給へれば、侍らふ人もめでたう見奉る。打  
とけぬ御有様なれば、是打むきて見給へと申させ給  
へば、女御殿<sup>彰子</sup>笛をば聲をこそ聞け。見るやうやハある。  
とき聞らせ給はねば、<sup>帝詞</sup>さればこそ是や雅なき人、七十  
の公箱のいふ事をかく宣ふよを。あふ恥かしやと戯

御笛をゆめいんず  
云く 一条帝ハ大  
貳高遠と市笛の師  
ふて頗る堪能お  
とせし由枕草子お  
もええさ  
打とけぬ云く 彰  
子の行儀正しく打  
け給ぬる様を  
り

なふ人のいとも  
今集の序に雅波理  
河香山のよのい  
手習ふ人の始りよ  
もあふとつる。後  
みよりて雅波理を  
さへ習はる人か  
きはる様ぞと帝お  
對して彰子のゆ  
若さ程をいへる  
中宮とつるさま  
宮二宮並におもし  
まをさすは市時より  
ぞ始まりぬ。  
大饗 だいきやう  
と香珠ふまべし客  
を招て祝ひの饗  
宴を催まらる

聞えさせ給ふ程も、侍らふ人々あなめでたや。此世の  
めでたき事ハ、只今の我等か交らひをこそせめと  
ぞいひ思ひける。なまはのともならはせ給ふ人なき  
御有様におとします。はかなく年もかへりぬ。今  
年ハ<sup>長保二</sup>后ふ立させ給ふべしといふも、世に申せば此御  
前の御事なるぞし。  
<sup>廿五日</sup>三月ふ藤壺<sup>彰子</sup>后に立させ給ふべき宣旨下りぬ。中宮と  
聞えさす。此侍<sup>定子</sup>らはせ給ふをば、皇后宮と聞えさす。や  
がて三月つごもり、大饗せさせ給ひて、又いらせ給  
ふ。今年ぞ十三ふならせ給ひける。あはれふ若くめで  
たき后もおとしますかな。<sup>定子</sup>皇后宮けふあす出でさ  
せ給ひなむとするを、せちとなほくと聞えさせ給ふ。



それと嬉しと云く  
中宮ハ懐難此  
を嬉しと思ふべき  
ならむと申給ゆ  
今年ハ人の慎むべ  
き云くハ中宮こと  
とし廿五才ふたら  
せ給へばいとゆる  
厄年まで世留の人  
の慎むべきとしふ  
あはると云  
宿曜 まくろうと  
讀むべし二十八宿  
の星と操り人の年  
又あてく其年のま  
凶とよむもの

二月小参らせ給へりしふついたち頃又里まで御月  
の御事ありけるふ三月廿日餘りまでさる事なけれ  
ばいりくあやしうていとくいかみくと心細う思さ  
るべし。上もい<sup>一條</sup>かあれバ又かおぼつかなげ又宣まは  
すもも<sup>定子詞</sup>それを嬉しと思ふべきも侍らず。今年ハ  
人の慎むべき年もあり宿曜なにも心細くのみ  
いひて侍れば猶いとこそさあらん又つけても心細  
かるべけとなどぞうちかこらひ聞えひさせ給ひける。  
三月つごもりに出させ給ふも哀ふ悲しき事多く聞  
えさせ給ひく御袖もひとつならびあまゝ濡れさせ  
給ふかへもぐ此月の御事さもあらずならせ給ひぬ  
るをいでやさも心憂かるべきかなと哀ふ物のみ心

香の野 此巻小ハ  
空子才宮かくれ給  
ひて多野おとさ  
めきり来三條院  
子の尚葬送も同じ  
野あて行もせ給へ  
るやあるふよりて  
給なづけつ  
をきのうえ風云  
和漢の書上秋世  
ふ武彦將  
秋を野夕まられ  
こそ唯あらねをき  
の上風萩の下つゆ  
とあるふよまら

細う思しつづけけらるるをゆゝうかく思をじとお  
ほし返せどいとうたてのみ思さる。其後つゆ物を聞  
し食さでたぐ夜ひる涙ふりきてのこおをしませば  
帥殿も<sup>隆家</sup>中納言殿もいみどき大事小思し歎きたり。  
⑦とりべ野  
かくて八月をかりふなまは<sup>定子</sup>皇后宮ふハいとものこ  
ころほそくおぼされてあけくまハ御なみどふひぢ  
てあられふすぐさせ給ふ。萩のうは風萩のまた露も  
いと御みくよとまりてすぐさせ給ふもいとく  
むかしのみおぼされてながめさせ給ふ。女院<sup>詮子</sup>よりハ  
おぼつかあからず御せうそこたてまつらさせ給ふ。  
うちよりいたるふもあらぬ御事を心苦しうおぼし

僧などともまづま  
 まの程勢ある方を  
 怪りなく勤めて其  
 後小こそと信連の  
 中世の南方を幸岡  
 小思ふよと怪ら  
 ずハ一本ふかすを  
 有りいづれよても  
 少こも  
 ありの代りむら  
 りの云く 代信お  
 どのよらぬが後  
 難あら居探りな  
 どをふけても我  
 方不捨誓ありし時  
 子信懐妊のすもあ  
 らむかうハあらじ  
 と思ふなり  
 罪のこそハハ  
 我身のためは傍た

やらせ給ひてくらつかさよりさまぐの物たてまつ  
 らせ給ふ御つゝもおぼすさまもあらず御  
 修法二壇ばうりさべき御讀經などぞあれど僧など  
 もまづさべきところのをバ憚らずつとめつからま  
 つらんと思ふ程ふ此宮定子の御讀經などをバあやし  
 かいりばかりのものはかぐ志からず何ともなくい  
 をのみぬるふつけてもさもありぬべかりをりよ  
 かやうの御首様もあらましかバいかにかひぐ志か  
 らまゝなぞやいまいたゞ念佛をひまなくきかバや  
 と覺しなむらまた此僧たちのもてなし有様いそご  
 しげさかども罪をのみこそいつくるべかめきなど  
 おぼさとしてたゞさるべき宮つかさなどのおきてよ

ちを使役まるも罪  
 つくりの目ごしを  
 ひてちひてを物せ  
 ぬや  
 慎ませ給ふべき  
 年例の廿五の厄  
 年をいふなり  
 ばらへ 神又祈り  
 て罪けがれを被つ  
 のぞくまあり

任せられて過ぐさせ給ふ。  
 かゝる程又十二月ふなりぬ定子みやの御くちちあやま  
 しろおぼされてけふやくと待ちおぼさるゝ又今年  
 かいみじう慎ませ給ふべき御年又さへあれバいか  
 みくとあやましげ又此殿をら見奉らせ給ふふいと  
 と苦しげにおはします。さるべきはらへ御誦經など  
 ひまふしやんとなきあるしある僧など召しあつめ  
 てのゝ志りあひたり御ものゝけなごいとかしがま  
 しろいふ程ふ長保二年十二月十五日のよるふなり  
 ぬ一條内よもきこしめしてければいかみくとある御使  
 志きりなりかゝる程又みて生也給へり女様子はおい  
 ますをくちをしけとどさなれとひららふおはしま

故の馬子 後彦と  
もいひく胞衣をお  
ろまをいふ  
御誦經取出でさせ  
御誦經の布施物  
取也でさせ給ふと  
何のべきを略して  
かくいへる

あきいれを 亡き  
宗様子よそ時表の  
申なる

すを、まさるゝやなく思ひて、今ハ後の御ことになりぬ。ぬかを突きさわぎ、よろづ御誦經取出でさせ給ふ。御湯などまるらするふ、聞しめしいるゝやうもあらねバ、みか人あきて惑ふを、かしこき事とする程ふ、いと久しうなりぬを、猶いしくおぼつかなし。御となぶら近うもてことと、帥殿御かほを見たてまつり給ふふ、むげよなき御氣色なり。あさましくてかひさくり奉り臨へバ、やがてひえさせ給ひよけり。あなしみじとまどふ程ふ、僧たちさまよひ御誦經志きりおて、内よも外よもいとぬかをつきの、志とど、何のかひもかくてやませ給ひぬを、帥どのハ抱き奉らせ給ひて、聲もをしまさずあき給ふ。さるべきなるとぞ

此殿をらの雨およ  
云々 伊周隆家配  
流せられしおをい  
ふ

さのみいひてやいとて、若宮をバ抱きはなちきこえさせて、かきふせ奉りつ。日頃ものをいと心細しとおもほしめしたりつる御けしきも、いかよと見奉りつとぞ、いとかくまでハ思ひきこえさせざりつる、命長きいらきことよこそありけれとて、いかで御ともよ参りなんとのみ、中納言殿も帥殿もなき給ふ。ひめ宮わか宮などみかことかたに渡し奉るよつけても、ゆめしう心うしごの殿ばらの御をりふ、宮のうちの人  
の涙ハ盡きはてふしかど、残り多かるもの也けり  
と見えたり。内よもきこしめして、あはれいかよ物をおぼしつらん。げにあるべくもあらずおもほしたりし御有様をと、あられと悲しうおぼしめさる。宮たちい

いふとせせび云  
云 これも帝の侍  
意まてのころ宮た  
ちの幼きをいふま  
とにもとあり歎  
せ給ふ

その後まきやう  
死後のうまか  
ちの葬儀の次第か  
どか、せ給へる

よもまから云  
此致後拾遺集哀  
傷の部あり

とをさなき様まで、いかまといつきせず思し歎かせ給  
ふ。  
み<sup>定子</sup>やの御手ならひをせさせ給ひく、御帳のひも又結  
びつけさせ給へりけるを、今ぞ<sup>伊周ヲ始</sup>帥殿御かぶくなど  
りて見給ふに、このたびいかぎりのたびぞ。我のけち  
すべきやうなどか<sup>定子</sup>、せ給へり。いみじうあはれなる  
御手ならひども、の<sup>帝</sup>うちまたりの御覽じまこしめす  
やうなどやと、おぼしけるよやとぞみゆる。  
歎もすがら契りし事を忘ぜず、こひん涙の色ぞ  
ゆかりきまほし。  
ある人もなきとて路よ今はとて、心ほそくもい  
そぎたつかなまほし。

けふりとも云  
相りとも云の如く  
よならぬ才と火火  
此葬のぬはまなり  
此寺のやう前  
の歌の言のまよふ  
れはとて例の作法  
とい火葬といふ  
も泣野 御おま  
形ありたまや  
冥届あり。  
所せき<sup>い</sup>まほし  
さ 厳重なる行装  
とよふ

こがね作りの系毛  
こがね<sup>い</sup>飾

けふりとも雲ともならぬ身なりとも、草ばの露を  
それとかがめよ。などあはまなる事どもおほく書り  
せ給へり。此御ことのやうまで、例のさほうまで、  
あらでと、思しめしけるなめりとも、<sup>伊周</sup>帥殿いそがせ給  
ふ。鳥部野の南のかさふ二丁をかりさりて、たまやと  
いふものをつくりて、ついひぢなど築きて、こいお  
いしまさせんとせさせ給ふ。よろづいと所せき御よ  
そほしさおおいしませば、事どもしおのづからなべ  
てにあらずおぼしおきてさせ給へり。かゝる事をも  
<sup>男ナ御子</sup>みやくの、何ともおぼしたらぬ御ありさまども、い  
みじう悲しう見奉る。<sup>疾子</sup>宮いことぞ廿五又あらせと  
まひける。その歎も成りぬれば、こがねづくりの系毛

れるおちうこれハ  
婦人不限り男子  
乗用の例と見ず

おろしますべき  
更屋なり

たれもは云く此  
歌集古今集哀傷の  
詠ありきと踏る  
ハ雪と命とどうね  
たり

の御車もておろしませ給ふ。帥殿伊周よりはじめ、さる  
べき殿ばら皆つかうまつらせ給へり。こよひも雪  
いみじうふりて、おろしますべき屋も皆ふりうづみ  
たり。おはしましつきてはらはせ給ひて、うちの御志  
つらひあべき事どもせさせ給ふ。やがて御車をかき  
おろさせ給ひて、それながらおろしませす。今ハまか  
で給ふとて、殿ばら明順道順など云ふ人も、いみじ  
うなきまどふ。折しも雪かどときふおろし所も見え  
ずふりぬれば、伊周そち殿、  
後も皆きえ残るべき身ならねど、ゆきかくれぬる  
君ぞかなしき。隆家中納言、  
白雪のふりつむ野べハ跡たえていづくおはかと

僧都君 隆田  
宮の弟なり

かまの八野も云  
火葬おらば烟り  
ふかまむのべと眺  
めてよま心をやら  
んよとなり又横を  
るよ秋の河などお  
よれるよや  
野べまても云  
此歌後拾遺集哀傷  
詠ありきと見ハ

天をたづねむ。僧都君、  
ふる里ふゆきもかへらで君どもよ同じ野べもて  
やがてきえなん。たどの給ふも、いみじう悲し。こよひ  
の事繪ふかへせて、人をもみせまほしうあはれなり。  
二條内ふハこよひぞかしとおぼしめしやり、夜もすから  
御とのごもらずおもほし明させ給ひ、御袖のこほ  
りも所せくおぼしめされて、よのつねの御有様なら  
ば、かすまん野べもながめさせ給ふべきを、いかよせ  
んとのみ思しめされて、  
望ぶまでも心ばかりハ通つども、わがみゆきとも  
知すやあるらん。なごぞ思しめし明しける。  
かくて十月九日に御賀あり。土御門殿即ち東門院もてせさせ給ふ。行

行幸と雪とどかぬ  
たり  
十月ふたばあり  
これい長保三年の  
こころをさる女院  
の四十の宮おほや  
けざまふせんのも  
用素ありしげんろ  
の障りありてきう  
やうは月よせさせ  
給へん

とる御舞の云  
神楽不辨しつ小曲  
ありゆこまきハ柳  
枝のゆこまきハ柳  
の春庭未とどか  
ねたり

納蘇利 かそりハ  
一名落路 しし高  
廉の樂曲ならぬと  
傳 其詳ならぬ

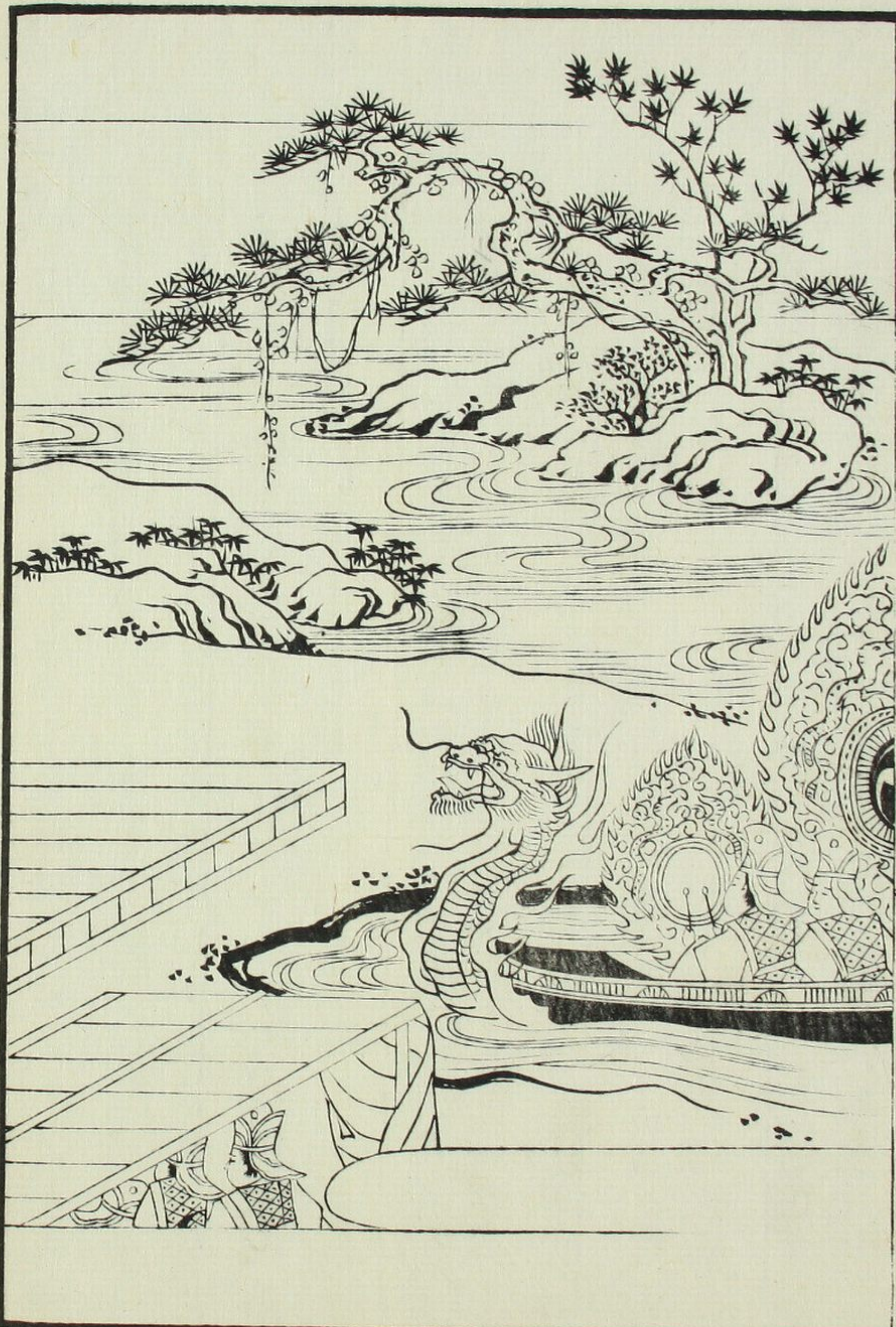
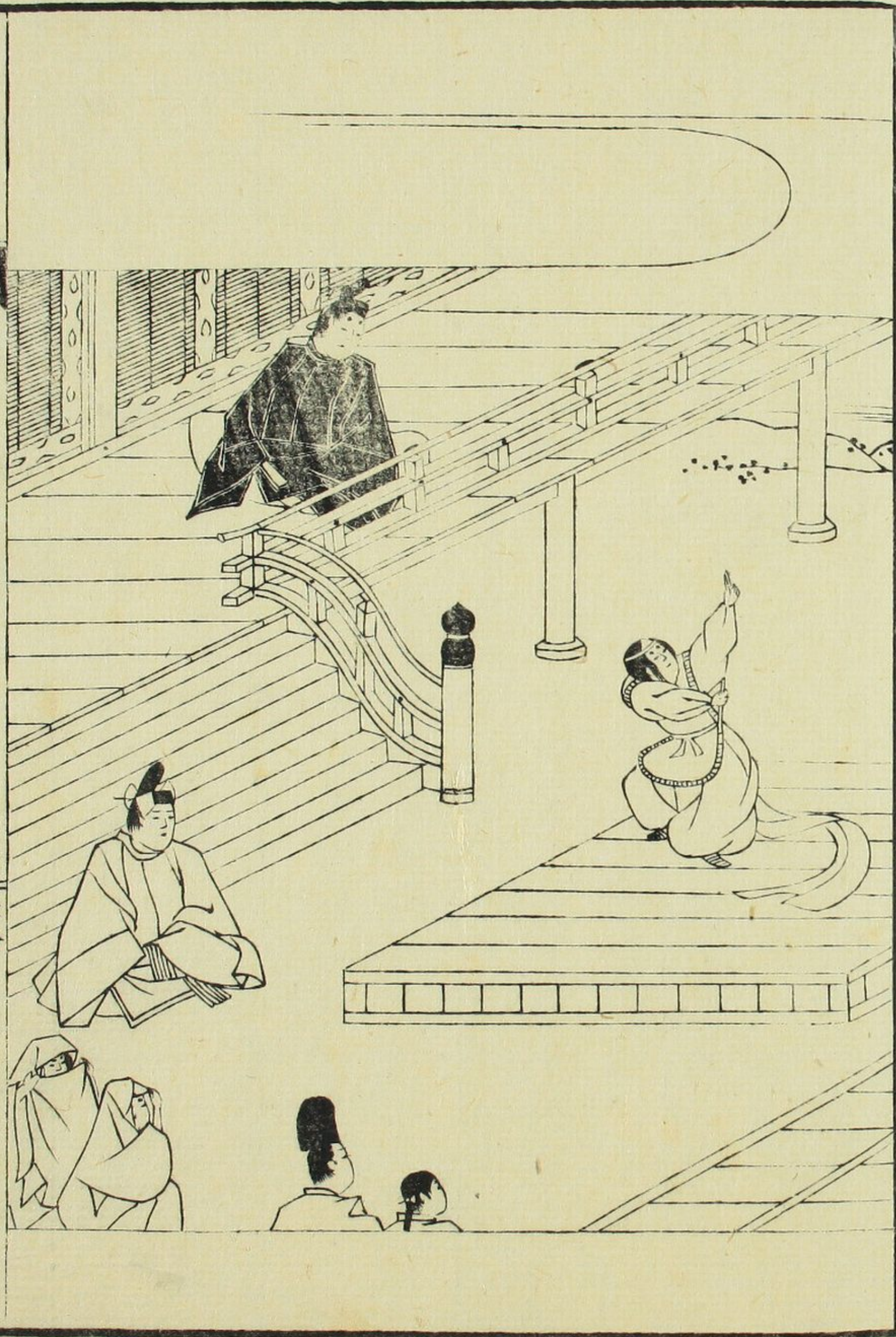
陵王 唐土より傳  
本の樂 て蘭陵王  
入陣の曲 ともり  
さいで 裂きたる  
脩なり

幸あどあり。いといじうめでたし。御屏風の歌ども  
上手ども仕うまつれり。多かれど、同トすぢのこことハ  
か、ず。八月十五夜ふをそこ女物語りして、妻戸のも  
とよるたるよ、辨資忠、

天の原やどしちかくハ見えねども、すみかよはせ  
る秋の夜、の月。神樂しとる所よ、兼隆、

沖ふもとるさうきさ葉のもとすゑふむれるていの  
る君がよろづ代などぞありし。まひ人家のこの君を  
あり。ことどもやうくはつる程よ、道長殿の君達二ところ  
ハ、わらハよてまひ給ふ。たか松殿の御はらのいハ、頼宗九歳君  
ハ、納蘇利舞ハ給ふ。倫子とのうへの御らのたつきこ  
ハ、陵王舞ハたまふ。殿の有様めもはるかよおもしろ

し。山のもみぢかかずをつくし。中島の松ふかされるつ  
たの色を見れば、くれなる蘇枋の濃き薄き青う黄ふ  
るなど、さまぐの色の、つやめきたるさいでなごを、つ  
づりたるやうお見ゆるぞ、せよめてだき。池のうへハ  
同じいろくさまぐの紅葉のふしきうつりて、水のけ  
ざやかよみえて、いみじうめでときふ、色々の錦の中  
よりとちいでたる船の樂きくふぞ、ろさむくおも  
しろし。すべて口もきかねばえかきもつげけず。萬の  
事志つくさせ給へり。彰子中宮西の對ふおハ、院院  
ハ、寢殿おはしませバ、一條うへもひんがしの南おもて  
ふおはします。倫子とのうへの東の對ふおハ、しまして、  
上達部などハ、渡殿よつき給へり。諸大夫殿上人など



つげたり 和名抄  
小幡阿計大帳也  
又由天幕のとし

かづけの 装束  
よそへは被けし  
ちよりちり名づく

ものねせさせ 熱  
せさせ給ふまの  
病をいふものい  
添へたる河之

ハあげバリふつきたり。院の女房寢殿の西南のわた  
ごの小候らふ。みすのきはなごいみじうめでたし。こ  
ともはてて、行幸かつらせ給ふ。御おくり物上達部  
のろく殿上人のかつげ物など皆志つくさせ給へり。  
神無月の日もまかなく暮ぬまは、皆事どもはてて、院  
ハ三條院又の日ぞかつらせ給ふ。さきぐの御賀ふ  
ごはいかどありけん。これはいとめでたし。入道兼家どの  
の六十の賀院詮子の后の宮ときこえさせし時、せさせ給  
ひしも、いとかくハあらざりきとぞおぼされけり。  
かゝる程詮子女院ものねせさせ給ひく。なやましう思  
しめたり。道長の御心をまごハしおぼしめし、惑を  
せ給ふ。はらなく思しめ志より、日頃よなれば、わが御

れはならぬさま小  
云く 是よりさま  
女院の今年ハ不例  
がちりて存念おぼ  
つらなきふし帝小  
宣ひしあればお

まはく 寸白ふて  
女よ多き病の名お  
り

心ちふ、いかなるまふか、と心ぼそうおぼさる。うちふ  
もれはならぬさまおおもほしの給ハせし物を、いか  
がおはし、まさんとおもほしめすより、やがておももの  
なども御覧じ、いれさせ給はずよろづおぼしめり  
たるを、御めのとたちもいかにと見奉る。中宮彰子若き御  
心なれど、この御事をさまごふいみじうおぼさる。道長殿  
いまいくすし、又見せさせ給ふべきなり。いとおそろ  
しきこと也とよび、聞えさせ給へど、くすしに見す  
ばかりよては、いきてかひあるべきふあらずと、心つ  
ふくのたまえせて見せさせ給はず。御有様をくすし  
小語りきかすまは、すいくふおハしますなりとて、其  
かこの療治どもを仕うまつれば、まさるやうふもお



汗などあえさせ  
汗まゝ血などの湧  
きいづることをあめ  
とらふ

つごもり 今、晦  
日のとよいへど本  
義は月ごもりよそ  
月の下旬をいふ

はしまさず。目ごろふ成りぬればよや。汗などあえさせ給へれば、後も心のどかおほほし見奉るよ、たゞ御物のけどものいゝおどろくしきに、御僧法かづをつくし、大かたせふあゝかたの事どもを、内藤が道長殿がた院詮子がたなど、云かたふあかれてよろづおほほしいそぎたり。内一よ一いいかみくと目くよ見奉らまほしうおほほしたまご、目ついでなごえらせ給ひて、目ごろハ只すぎふ過ぎもていぬ。  
かゝる程につごもりふありぬまご、世の中物さどがしうきむ頃なるふ、かうおこたらせ給はぬを安きそらちく、おほやけわくししの御歎きなり。かくて行一幸あり。けふときこしめして、いつしと待ちきこえさせ

若宮あつころを  
云く 若宮は皇子  
中宮のうみ給へる  
よそ母宮崩後やが  
て女院の方ふ養と  
れ給へるなり

序涙のいでさせ給  
えぬ云く 台記々

給ふ程ふ、午の時ばかりよぞ行幸ある。みこしよりおりさせ給ふほども、心もとなくおぼしめされて、いつしと見奉らせ給へば、さばかり苦しげとおほしきすふ、わか宮御ふところも離れずいでりさせ給ふを、かた時の程ふ心ぐるしく見奉らせ給ひて、中將のめのとを召出で、これ抱き聞えよとの給はすとバ、いなとて御ふところよいらせ給ひぬ。あさましうあらぬ人ふならせ給へる御かたち、御涙とまらずおもほしめして、今まで見奉らず侍りけることのみみどき事とて、せんかこなくいゝと悲しと思しめしたり。院詮子もどもかくも申させ給ふ事なく、唯つくぐと見奉らせ給ひて、うちなかせ給へど、御涙のいでさせ

安三年九月六日の  
条不入夜向外祖母  
尾公家向疾病余大  
哭祖母亦哭淚不落  
俗人以之為死相未  
知所出云々ともあ  
れば此頃の俗涙落  
ちざると思むなき  
事とせしあるべし

あつらひらせ給云  
云 此三条院ハ群  
の崇りある由めて  
純き方をよひける  
公平権伸といふが  
ある所より一そ  
そへ入らせ給  
ふこ

せ給はぬも、これハゆゝきことよこそあなまきと、見  
奉らせ給ふも、いとゞせきもあへずなかせ給ふ。年  
ごろの行幸のさほう又、様ことよゆゝしうのみおは  
します。御有様聞えさせんかたなし。そこらの女房涙  
ふおぼせたり。殿道長も御くちらハさかしうたぼしめせ  
ど、ろづお悲しきことを御おほしの袖も忘ほごけ  
ふて、いで入りあつかひきこえさせ給ふ。やがてこよ  
ひ外惟神止所へわたらせ給ふべけま、かゝこの御さうぞく  
の事など、よろづよの給はせても、たゞ一所うちまき  
つゝ、いで入りせさせ給ふ。行幸一條の御ともの上達部殿上  
人、そこらの人、くいみじうかなしう、いかよおハしま  
さんとのみながげき給ふ。上一條ハさら又御聲もをしませ

飛あうく心うき物  
ハ云々 天子の事  
おなれバ、歌々母  
官の事、お抱もちり  
難きと罪業ふりき  
ると却りて心うき  
おやしめを中あり

給はず。ちごどもおどのやうみ。さくりもよくとなか  
せ給ふ。日もはかなく暮せぬれば、道長云どのはやかへらせ  
給ひなん。よさりの御わたり、おふけ侍りなん、いた  
うそゝのかし聞え給へ、一條みうどあまも罪ふかく、  
心うき物ハかゝる身もありけるかたよ。この御有様  
をみすて奉る事のいみじき事、いふがひなき人だよ、  
かゝるをりかゝるやうハあらじかし。心うかりける  
身なりや。猶わたらせ給ひん所までと思しのたまは  
ま、とどさるべき事よもさぶらはずとして、猶とくかへ  
らせ給ふべく、奏せさせ給へ、詮子院ものハの給はせぬ  
ど、あかで還らせたまはんことを、かなしうおぼされ  
たり。御手院をとらへ奉らせ給ひて、御顔のもとおわが

御かほをよせておかせ給ふ御有様、そこらのうちと  
の人とよみたり。

所などかへさせ云  
云 平権仲といふ  
がまれる所へ移り  
給ひなり

所おどかへさせ給へれば、さりともなど頼もしく覺  
しめす程ふ、日たらせ給ひて二三日ありて、遂に空し  
くならせ給ひぬ。道長との御心ちとへ聞えさせんか  
たふし。一條内ももきこしめして、ひごろもあるもあら  
ぬ御心ちを、すべていととおぼし入らせ給ひて、つゆ  
御湯をどみきこしめさで、いととらうおはします。  
ことわりの御ありさまなまを、聞えさせむかたなし。  
長保三年十二月廿二日の事なり。程おともいと寒く、  
雪などもいと高くふりて、大かたの月日さへ又残り  
すくなく、こよみの軸あらはふ成りたるも、あはれを

こよみの結 年の  
暮るる層とも巻

きつとして軸のあ  
らくふなりとるこ

ましたるほどの御ことあり。かくて三日むりあり  
て、とりづ同廿四日ナリ野もぞ御葬送あるべき。雪のいみじき道長殿  
より始めよてまつりぶるづの殿上人いづきかひの  
こり仕う奉らぬいあらむ。おはします程の儀式あり  
さま、いふもおろかななり。殿の御心よけれあつかひき  
こえさせ給ふよ、内一條の御心ざりの限りなき、あひそひ  
たる程ハ、おろかなるべき事かハ。さて夜もすがら道長殿  
よるづにあつかひきこえさせ給ひて、曉よなきハ皆  
かへらせ給ひぬ。雪のいみじきにつねのみゆきふハ、  
かくやはあらじと、思ひいできこえさすも、袖の  
氷ひまなし。曉よハ道長殿御骨かけさせ給ひて、本幡へ日  
たらせ給ひて、日さし出でるかへらせたまへり。さて

殿の御心ふれ云  
云 道長の心を盡  
して取扱ふうへハ  
帝の御心程の程相  
添ひたれいといふ  
おろかなるべきふ  
あつととなり

きざの色々り  
喪服と着る由なり

程もあく御その色かはりぬ。内一ふも哀みて過ぐさせ  
しまふ。天下諒闇ふなりぬ。はうなくて年もくもぬ。

ハはつ花

つ花 此花の中  
より上東門院後一  
条帝とせ給へる  
事ありは打送せ給  
びて我家の榮花の  
初まはまぞといへる  
由つが三花の表ふ  
るゆそれふよりて  
表の名となれり  
司召 京官除目と  
もいひて在京の諸  
官をめてそれぐ  
上任せらる儀な  
り  
春日使の少將頼  
通ハ寛弘二年少將  
ふなりて春日祭の  
使つとめしむあれ  
ハ花の春日社ハ  
和歌添上郡ふあり

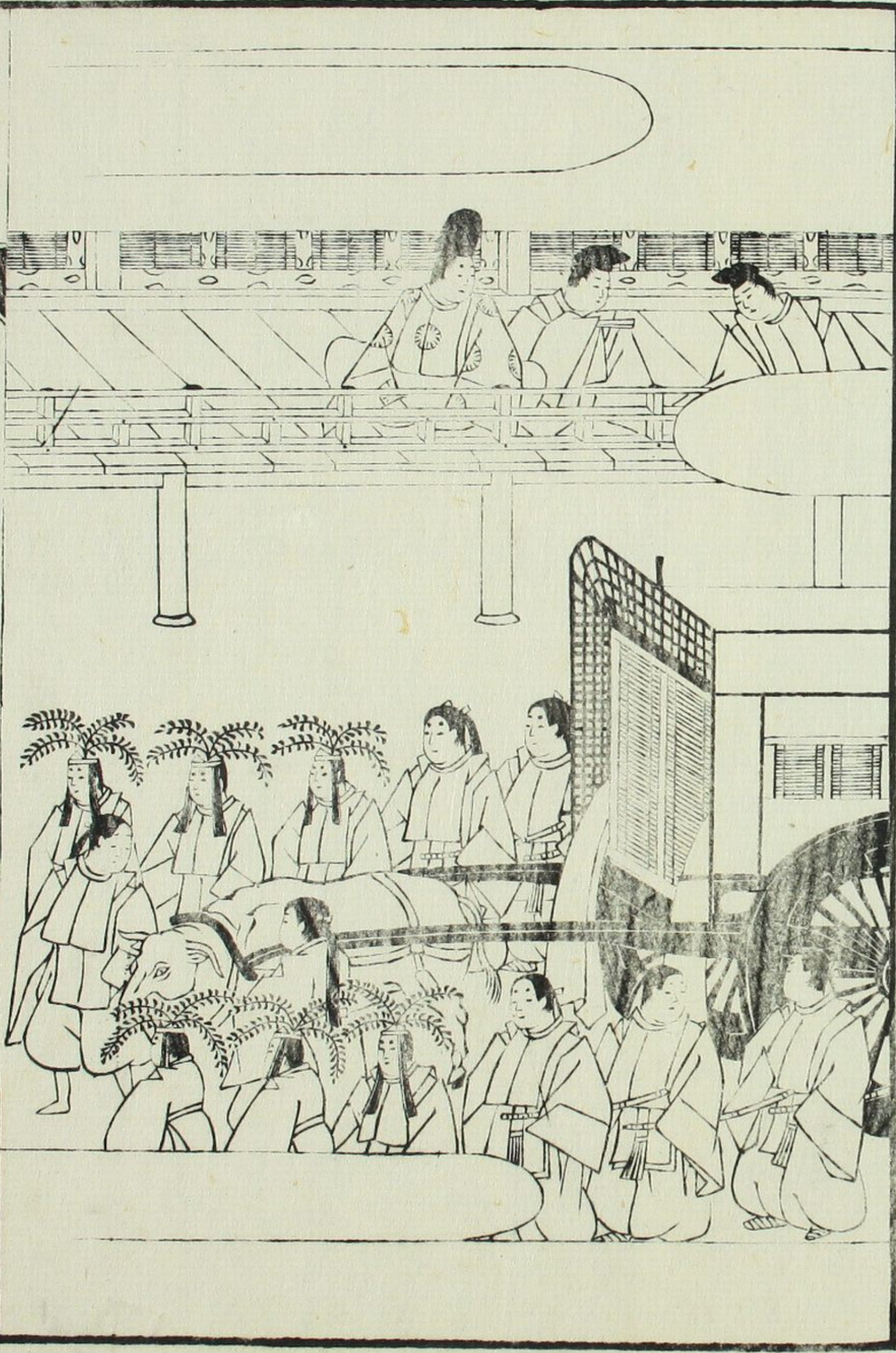
寛弘二年小成りぬ。司召教通などいひく殿の君たちこの  
御はらのお教通と君高明女高松殿の御はらのいは頼宗ぎみあど  
皆御かうぶり給ひてほどくの御つかさども少將  
兵衛佐あど聞ゆるよ春日使の少將頼通ハ中務ふなり給  
ひてことしの祭のつかひせさせ給ふと道長のハ一條の  
御さじきの屋ながくとつくらせ給ひく檜皮葺勾欄  
などいみじうをかしくせさせ給ひて、此年ごろ御け  
いよりはおめまつりを道長殿も倫子うへもわらせ給ひく  
御覧するよことしハつかひの君の御事を世の中ゆ

檜皮葺 檜の板  
もて葺ける屋  
のけい 大嘗祭の  
御櫛なり上注  
せり

は使のひまき  
いさま俗ふさまき  
とつふ同じ  
きんのうらし 光  
仁帝寛弘八年五月

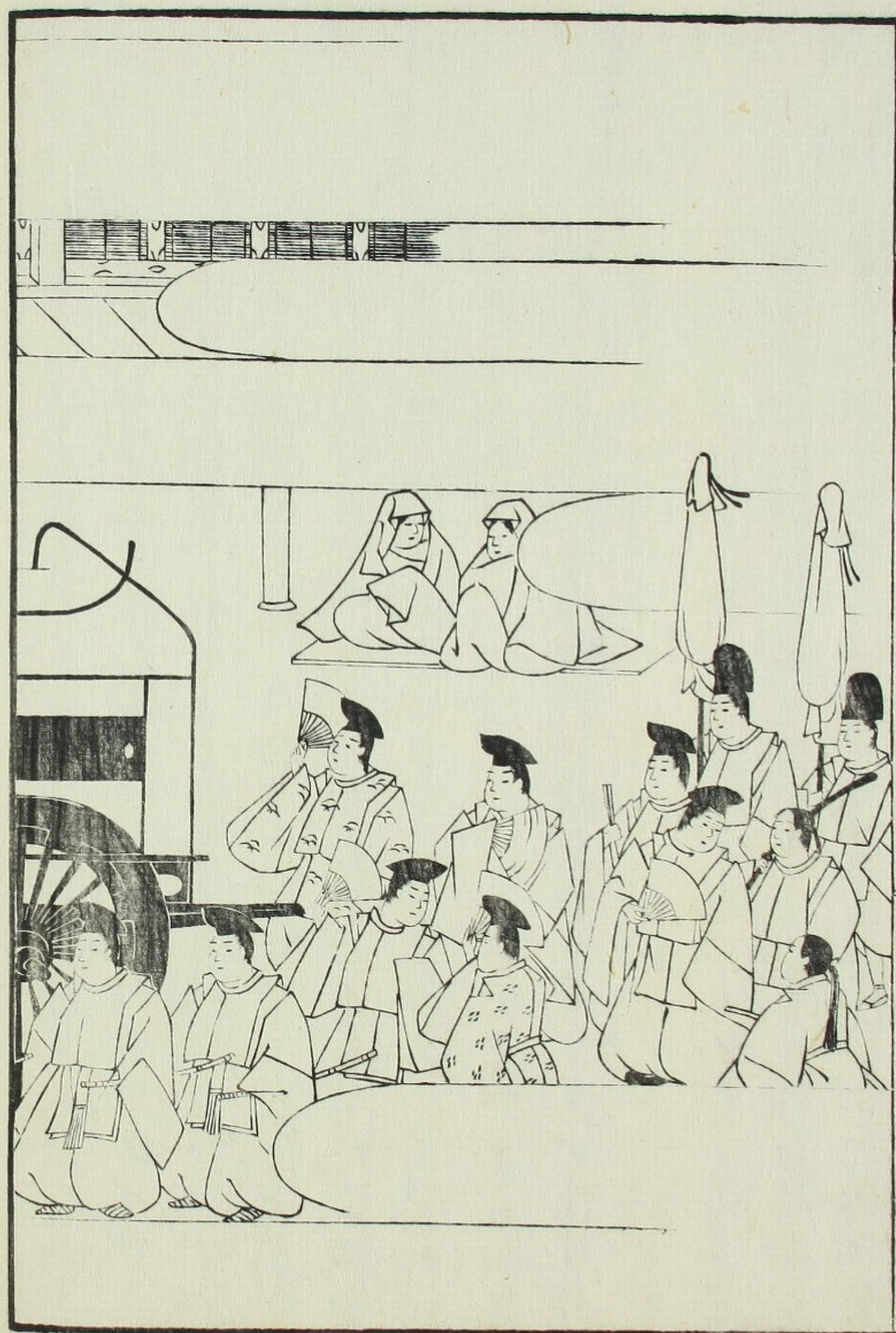
すりていそがせ給ふ。その日よなりぬをみな御さ  
トきふわらせ給ひぬ道長殿ハつかひの君の御いでた  
ちのこと御覧じはてぞ御さぢまへおはします。  
多くのどのばら殿上人ひきぐしておいします。さし  
もあらぬだよこの使ふいで立給ふ君たち、これを  
いさまきことふおやたちハいさまき給ふことなれば  
まいてよろづことよりに見えさせ給ふ。御ともものさ  
ぶらまの難色小舎人御馬ぞひまであつくさせ給ふ程  
えぞまねばぬやことしハ此使のひまきよて教道師宮花  
山院あどわざと御車たてまものを御覧じ御さじ  
きの前あままたびわたらせ給ふ。師宮の御車の志り  
よ和泉をのせさせ給へり。花山院の御車ハ金のう

茶花物語



四十四

茶花物語



渤海國王王金係一  
其外の物も賜  
り賜ひ由候日本  
紀世口ふんえたれ  
バ古くよりありけ  
むるあらる  
めしつき 西宮抄  
院宮雑字の中ふ  
所隨身勤夜行呂  
継奉時云と見え  
拾芥抄院司部ふ  
召次所あれが申し  
次ぎと後とて院  
宮ふ奉仕せら職の  
名なり  
もとの俗と花山  
院と共は法師ふか  
らぬ限りそつふ  
ゆくりうらふも 紀  
なふふ不志とらき

るしなごりふやうふぬらせ給へり。網代の御車をす  
べてえもいはず造らせたまへり。さはかうもすべか  
りけりと見えたり。御ともふ大童子のおほきやか  
とねびたる四十人、中童子廿人、めしつきはらハも  
との俗どもつかうまつまり。御車のちりふ、殿上人ひ  
きつれて、色くさまぐりて、赤き扇をひろめかしつか  
ひて、御さどきの前あまたとび渡りあるかせ給ふ程  
たごの年ならバ、かゝらでもなご殿見てまつらせ  
給ひつべけと、使の君の御物のほえよおもほきと  
て、上達部うちほく、忍み、殿のおまへなほけしきおハ  
します院なりかしふ。このを<sup>瀬通</sup>この使ふたつ年、わを  
こそ見はやさめとの給ハすと聞きしもあくるく、ゆく

てゆくりやと訓  
めるに同じ心づく  
の語とてこもさる  
はなごといふ詞と  
省きていことなら  
ぬ様なれと書時ハ  
かく<sup>か</sup>つてゆくり  
りうと云ひてゆく  
りなごの志とまる  
なるべし、かゝる例  
いと多しさてこ  
の志と志ひがけむ  
意外にもむで給へ  
るのふと打無とし  
たる由なり

りかとも出で給へるかなと皆興じきこえ給ふ。  
寛弘五年ふ成りぬきバ、夜の程に峯の霞もたちかは  
り、よろづゆく末はるか、のどけき空のけしきなる  
ふ、京極殿より、かんの殿ときこえさす。ハ、<sup>姪子</sup>なか姫君  
ふおハします。その御かたの女房小ひめ君の御方な  
ど、いとさまぐりにいまめかしげなる有様よてさぶら  
ふ。殿の御まへ、<sup>道長</sup>かんのとの御方よおハしまして見  
奉らせ給へバ、十四五ばかりよおハしまして、いみぢ  
う美くしげよ志つらひす忍奉らせ給へり。いろくの  
御ぞどもをぞたてまつりて居させ給へる。御ぐしの  
紅梅のおり物の、御ぞの裾よかゝらせ給へるほどひ  
まなうやう志かけたるやうよて、御たけよハ七八寸

やうしかけたる  
昔衣の光りを出  
さんよめふ貝ま  
摺りてつやうら  
まるをやうすとい  
ふ宇津保物語  
の上ふしぐしとや  
うかけたるごと  
しとひまなぐゆり  
かりてむひのる  
やうふえ給ふと  
ゆるめてこのさ  
まごも怪るべしや  
うての字音あ  
ひなのやうみて  
今の難人形のや  
なり  
小うちき 女の  
への衣なり

はうりハあまらせ給へらんかしと見えさせ給ふ。御  
顔のかをりめでとくけだかく、あいぎやうづきてお  
としますものからはなぐとよほはせ給へり。うたて  
ゆしきまで見たてまつり給ふ。御前よりわきき人  
人七八人ばかりさぶらひて、心ちよげふほこりかな  
るけしきども也。又こひ<sup>盛子</sup>め君ハこのつ十ばかりよ  
て、いみぢう美しくしう、ひ、なのやうよて、こたうかか  
たまぎれあるかせ給ふ。うつくしき御ぞどもよ、もえぎ  
の小袷をたてまつりて、御色あひなどの、かりのこの  
はたちのやうよて見えさせ給ふものから、それハ唯  
白くのみこそあま。これはよほひさへそはせ給ひて、  
少納言のめのと、いとうつく志うまもり奉るも、よ

いこきもちひ  
正月の齒固餅と  
小児の頭を戴かせ  
官佐カタカレ命幸  
カタカレと祝言を  
る式なり委しく  
ハ松花甚々ふいゆ

その人めふあなうらやまこと見えたり。おと<sup>盛子</sup>ひめ君  
ふたつみつばかりみておはしませば、<sup>道長</sup>殿のおまへ御  
いこだきもちひせさせ給はんとする。御さうぞく  
まだ奉らねば、志ばしとの給を。此御ありさまども  
ふ御めうつりて、ごみもいでさせ給はず。おそくら  
ちも参らせ給ふとて、御つかひ志きりなり。上達部  
殿上人おほくまるりて、やがて御どもようちへにと  
思しとり。出でさせ給ふま、<sup>盛子</sup>みうるはしき御ふそひ  
みて、いと<sup>盛子</sup>きみの御いたまきもちひせさせ奉ら  
せ給ふ。御めのとの小式部の君いと若やのよてかき  
抱き奉りて参りむかふ有様なぐふいあらぬかた  
ちなり。<sup>倫子</sup>とめうへハ、かう君たちあまといで給へれ

さ、やう小き

中宮の御有様云々  
は一句錯乱と  
思へて頗るまき  
らるゝ其故ハ靴子  
中宮の御有様云々  
と上の御局おぼえ  
しまま云々と云え  
てこゝよいふべき  
由なればなうさ  
れど強ひていふ  
倫子の有様と中宮  
の御有様とを思ひ

どたごいまれ御ありさまおせはうりお見えさせ給ふ。  
さ、やかおをかしげよふくらかよ、いみじう美しくし  
き清さま姿おおましまし御ぐしのすぢこまやか  
まきよらよ御うちきの裾ばかりよて、末ぞほそらせ  
給へる。白き御ぞどもをかすわかぬ程よ奉りて、御け  
うそくおおしかりておはします程、いとめでたう  
見えさせ給ふ。靴子中宮の御有様とりぐよ見えさせ給ふ。  
おまへよ候らふ人も、おまへしう見奉るよ、紫檀の御  
ずゝのさ、やかなるをいざとならぬ御ねんずよ、御  
おび志どけなくかけて、御息おおかりておは  
しますほど、いそんかさなく見えさせ給へば、道長殿の御  
まへよ嬉子か君いだき奉りたる御めのとのきみを見よ

くらぶるふとく  
めでとうある由  
ならむらさて次の  
前ふさぶらふ人  
人倫子の前ふ  
る女房もなうべ  
し  
おび志どけなく  
かけ、これハ裳の  
腰ふつきたるかけ  
おびのふみてまを  
けなく取つころ  
るね様なる

うへの御局 清涼  
殿中ふあり

かの母の御有さまはいかゞ見奉るなり御むすめ  
のきんだちの御さまにハおとらぬ御有さまにこそ  
わかやぎ給へる。猶御ぐゝお有さまよと、いとおもは  
しげにうち急み見やり聞えさせ給へるもをかしう思  
ふ。威子小ひめ君のいたうまきれさせ給ふを、あなあこた  
ごしとせいし申させ給ふ。かくて道長殿の御まへ出でさ  
せ給ひて、むげよ目さかうこそ成りよけをといそ  
がせ給ひて、やがてこゝらの殿ばらの御車ひきつぐ  
けて、内よ冬らせ給ふ。靴子宮をうへの御局よおはします。  
御手習ひなどせさせ給ふハ、歌などよやとぞ、たごい  
まの御年せばかりよこそおはしますと、いと若うぞ  
おはしますも、とよりいとささやうよおと、もまめ



ほづつき 酸漿

浮紋の御ぞ 紋が  
らの糸の浮きたる  
織物なり

招こりて 浴ふ  
かこまりて居る事  
なり

色ゆるされたる  
禁色とて深紅深紫  
の類ひの服をみど  
り小着るるを聴さ  
れざると許さる

たるあり

かざみ 汗衫と  
く童女の上の衣

御心ち例もあら  
おは懐妊の御け  
しきなり

了。さらし猶いと心もとなきまです、やがせ給へり。  
御ぐし同じやうなる事なれど、えもいはずこまやか  
よめでたくて御たけふ二尺ばかり餘らせ給へり。御  
色白くうるはしうほづつきなどを吹きふくらめて  
すゑとらむやうよぞ見えさせ給ふ。なべてあらぬ紅  
の御ぞどものうへよ、白き浮紋の御ぞをぞ奉りたる。  
御手習ひよ添ひふさせ給へり。御ぐしのことばれか、  
らせ給へる程ぞおさましうめでたう見奉らせ給ふ。  
女房所くよりちむきつ、七八人つゝ招こりて候  
らふ。色許されたるハさるものもて、ひらからぎぬ無  
紋などさまをかしう見えたり。いよへの后はわ  
らはつかせ給はざりけれど、今の世ハ御好みよて

さまづつかはせ給ふ。やどりぎ、やすらひなどいふ、ち  
ひさくハあらぬが、かみなううやうだいをかしげよ  
て、かざみばかをぞ着させ給へる。上の袴ハきざ  
その姿ありさま繪ふかきたるやうにて、なまめかし  
うをかしげなり。さるべき御物語など志ばしうち申  
させ給ひて、殿上へ参らせ給ひぬ。例のさほりのこと  
ども有りて、いといまめかしうをかし<sup>中宮</sup>へのおん局  
のありさまよつけても、<sup>御家</sup>京極殿の御かたぐまづ思ひ  
いできこえさせ給ふ。中宮もあやしう御心ち例も  
あらむなどおはしまし、物もきこしめさずなどあ  
まど、おどろく事うもてなまきさがせ給はねど、おほ  
しつゝ、みて志はをも過させ給ひにけり。

むまらむら云く  
母むまら共一院お  
仕奉りておの  
子子をうめるこ

かゝる程ふ二月ふ成りて、花山院いとトウとづらそ  
せ給ふ。いさじうあをきいかよとき、奉つるほどふ  
御かさの熱せさせ給ふちりけり。あはきにかぎり  
みゆる御心ちをくすしなごたのみまをくあく聞えさ  
す。此むすめばらおやばらあまこの御子たちおは  
するふ、おのく女宮二人づゝぞおはしける。我死ぬる  
ものならむまづこの女宮たちをなむ、忌みの内ふ皆  
とりもてゆくべきと云ふことをのみの給はまをば、  
御匣殿もむすめも、ままづう涙ながし給ふ。おやばら  
のおと宮をば、そのはらからの兵部の命婦もぞうま  
を給ひけりま、ま、是はおのまが子よせよ。それハ志  
らずとの給はせけりま、やがて志か思てぞ喜ひ奉り

寺心地あうくふふ  
りて、市病ひまう  
て前後不覚ふなり  
給へるこ

いさうおはしま  
つる、こあてハ俗  
ふえらくおとしつ  
る宮といんが如  
いさうハ其々の  
喜ぶてふまふお  
しきものいふ酒ふ  
れバなり  
おそろいげなるもの  
の、甚妙の喪服を  
いふこ

ける。かゝる程ふ院の御心ちふかくあありて、二月ハ  
日ふりせ給ひぬ。御とし四十一まぞおはしましける。  
年ごろなま仕うまつる僧俗あはま悲しう惜み奉  
る予かぎりなり。殿たどもさすがよいいたうおはしま  
しつる院をくちをうさうくしきわざかたとぞ聞  
えさせ給ひける。御葬送の夜おそろいげなるものを  
着るとして、兵部の命婦、  
こぞの喜さくら色ふといそぎしを、こころハ孫の  
ころもをぞきる。とぞふみける。あはれなるうどもお  
ほかり。まことお御忌みの程この兵部の命婦の養ひ  
宮を放ち奉りて、女宮たちハ、かさはしより皆うせ給  
ひよけりま、よき人の御心ハ、いとおそろいきものよ

ぞ思ひきこえさせける。兵部命婦のそバ我志らずとの給はせけきバ、おぼしはなちてけるなるべしとぞ云ひつゝ泣きたげきける。

法興院 二条の北  
京極の東あり  
と二条関白の借領  
つりき  
軍のありみ 人の  
世ふあるハ牛年

秋のけしきふいりたつまゝ、土御門殿のありさまいはんかたなくいとをかじ。池のわたりのこぞ急や里水のほとりの草むらおのく色つきわたり、おほかたの空の景色のをかききふだんの御讀經のこぞ急あはれまさり、やうくすぐしき風のけはひよれいのたえせぬ水の音をひ、夜もすがらき、かふハさる。一日までハ法興院の御八講との、しりし程またなばたの目もあひこかきよけりとぞ、いくその羊の歩みをすぐしきぬらんととのこそおぼえけし。

を牽て屠所不近る  
が如し一日一步を  
進むごとく死期不  
近づく由の俚俗抱  
朴子内篇より摩耶  
羅も亦あり其致す  
を本みてかけるこ

五大尊の御修法  
一降三世二軍業利  
中央不動四大威徳  
五金剛夜叉の五大  
明王をわくる

くて宮の御事ハ、九月ふこそあたらせ給へるを、八月ふとある御いのりどもあきど、又それさべきもあらず。かゝる御事ハ月日かぎりあるほどなりなると、きこえ給ふ人もあきバ、げもとおぼしめさる。程近うならせ給ふまゝ、御祈りども敷をつくしたり。五大尊の御修法行はせ給ふ。さまぐ其法も従ひてのなりありさまも、さばかうこそはと見えたり。観音院勝筆僧正廿人の伴僧とり、ごて御加持まゐり給ふ。馬場のとおとゞ文殿などまで、みかさまぐみしゐつゝぞ、ききより参りちがひあつまる程、御前のからはしたとを、老いたる僧のかほみよくきわたる程も、さすがよめたてらるゝものからなほたふとし。ゆゑくしき

るやまひ 礼まひ  
まてうやまふふふ  
りうろと相通言ふ  
もバかくいふるも  
あり

後經あらそひ 累  
式部日記ふし所を

から檣どもをこたりこのまを分けつゝかへりいる  
程もはるか見やらるゝこゝちしてあはをなり。心  
譽阿闍梨ハ、軍陸利の法なるべし。あかきぬきたり。清  
禪阿闍梨ハ、大威徳をあやまひて、こしをかゝめたり。  
仁和寺の僧雅慶ハ、孔雀經の御修法をおこなひ給ひ、と  
くどくとまるりかはれぬ、夜もあけはてぬ。さまゝ耳  
かしがましくげおそろしきまど物も似ざりける。  
心よとからん人ハ、あやまりぬべき心ちしてむねを  
しる。かくいふ程も、八月二十ふ日の程よりハ、上達部  
殿上人さるべきは、皆とのゑがちよてはしのうへ臺  
のすのこ、わた殿などふうたゝねをしつゝあかす。そ  
こはかとなき若公達などハ、讀經あらそひ今様歌ど

かきてとねあらそ  
ひとわり後經あら  
そひハ後經の目  
ざを鏡ふしや

くきもの合せさせ  
給ひ 蕙物ハ諸種  
の香葉を細かく  
製する

白き御帳 法座の  
時ハ御帳のみなら

も、こゑをあはせなどしつゝ、論じあはせ給ふも、をか  
しう聞こゆ。あるをりハ宮齊信の大夫、左經房の宰相、中将、左兵  
衛督、美濃少将などして遊び給ふ。それハ誠みをかし  
うて、そうとちのなみとなきハ、まめだちたるもさす  
がよ心苦し。此頃とき物あはせさせ給ひて、人々よく  
ばらせ給ふ。御前よて御火とりどもとり出で、さまま  
ぎまのを試みさせ給ふ。かゝる程も九月ふもなりぬ。  
なが月の九日もきのふ暮まで、千世をこめたる離の  
きくども、行末はるかよたのもしきけしきなるよ、よ  
べより御心ちなやましげおほしまし、かバ、夜な  
らをかきよりかしがましきままでのゝゝる。十日ほの  
ぶのとすするよ。白き御帳ようつらせ給ひ、その御しつ

ずうづの調度人  
人の衣服まで白き  
を用ゐるは此等の  
作法なりき

寺もの、けどもか  
りうつし 中宮よ  
つくもの、けと加  
持の功力ふよりて  
他人よかりうつま  
こ

屏風をつがねつ  
つがねつがねつ  
とつがねつがねつ  
なる場所なれば

つがねつがねつ  
り

宗物語

らひかはる。殿道長よりはじめ奉り、公達四位五位たちさ  
りぎて、御几帳のかたびらかけかへ、御たゝみななども  
てさりぎまゐる程いとさりがし、日ひと日苦しげよ  
くくらさせ給ふ。御もの、けどもさまぐかりうつし  
あづかりくに加持の、しる。月ころ殿の内よそこ  
らさぶらひつる僧はさらよもいはず。山く寺くの僧  
の、すこしも志るしあり、おこなひするときこゝれす  
を、残らず尋ね召し集めたり。内條よい、いらくおぼつ  
かなく、いかなればかとおぼしめして、年ごろかやう  
の予もなれ知りたる女房ども一くるまよて参れり。  
御もの、けおの、屏風をつほねつ、験者どもあづ  
かりぐみかぢの、しり、さけびあひたり。其程のか

がましき物さわがしきおははかるべし。こよひも  
かくてすぎぬ。いとあやしきことよおそろしうおぼ  
しめして、いとゆゝしきまを殿道長の御まへものおぼし  
つげさせ給ひて、物のまぎれお御涙をうち拭ひ、  
つぎなぐもてなさせ給ふ。すこゝもの、心知りたる  
おとなとちの皆なきあへり。同じ屋なれど、所かへさ  
せ給ふやうありなど申しいで、北のひさしふうつ  
らせ給ふ。年ごろのおとなたち皆おまへ近くさぶら  
ふ。今はいかみくとある限りの人心をまどはしてえ  
忍びあへぬたぐひ多かり。法性寺の院源僧都御願書  
よみ、法華經この世よひろまり給ひし事など、おろく  
申しつげけたり。あはれお悲しきものから、いみじう

法華經はせふ私ま  
り給ひし、法花  
經の本お私ま  
し、道長のかなる

宗物語

百善堂供養の願文  
申すも之たりかし  
る作善のかしら  
申して佛を祈る  
みふりたてぬ  
云く 大被洞み  
めらぶ御らどみ仕  
へなるつうさく  
人どもを始めて天  
の下四方ふも今日  
より始めて罪とい  
ふ罪あらざし高  
天が原ふ耳ふりま  
て聞く物と云く  
とつりつらつづの神  
も耳ふりたてぬ  
願ふときうねいあ  
らじと云  
いま一つのあり  
後唐のつらふん  
かきふせまつて  
産婦と附せる作法  
なり

たふとくしてたのも。陰陽師として世ふあるかぎりめ  
しあつめつ、やをよろづの神もみふりたてぬは  
あらじとみえきこゆ。御誦經の使ともたちさききく  
らし、その夜もあけぬ。扱御戒うけさせ給ふ程などぞ  
いとゆるしくおぼしまどいさる。道長、打添へて法  
花經ねんど奉らせ給ふ、何よりもこのもしくめで  
たし。ゆるくさわぎて平らかよさせ給つ。そこら慶  
き殿のうちなる僧俗上下、いまひとつの御子のまど  
きよ、ぬかつきたる程はた思ひやるべし。平らかよ  
せさせ給ひて、かきふせ奉りてのち、道長、をはじめ奉  
りて、そこらの僧俗、おはれよりきくめでたきうち  
み、をどこよりさへおぼしませを、其喜びたのめなる

これハ罪うるまぞ  
云く 此頃の俗お  
るべし何の由も  
も知りけし

べきふあらず。めでたしともおろかなり。今ハ心やす  
くとのもうへも御かたふわたらせ給ひて、御祈りの  
く、陰陽師僧などよみな祿給はせ、そのほどハ御前  
ふ年ふり、かゝるすぢの人くみふさぶらひて、ものわ  
らき人くハ、けどほくて可くよやすみふしたり。御湯  
殿のとを儀式いみじうするとのへさせ給ふ。かくて  
御ほそのをハ、道長、うへへこれハつらうるまとかね  
てハおぼしめし、かど、たゞ今のうきさき、何事も  
皆思しめしすれさせたまへり。御乳づけにハ有國  
の宰相の妻、かどの御めのとの橋三位まゐり給へ  
り。御ゆどのなどにも、年ごらむつまじう仕うまつり  
なまゝる人をせさせ給へり。御湯殿の儀式いへばお

えひこ、けて云  
は茶禪りたらねど  
酔ひたらけての誤  
字あらんや  
ま、い古を繪入本と  
も小巻らずと有り  
されば又按ふ得目た  
けて参らすの術文もや  
白きなりトキ 當  
色とかくなるべし  
作法みかかひたる  
色なり衣服令の當  
色とい異なり

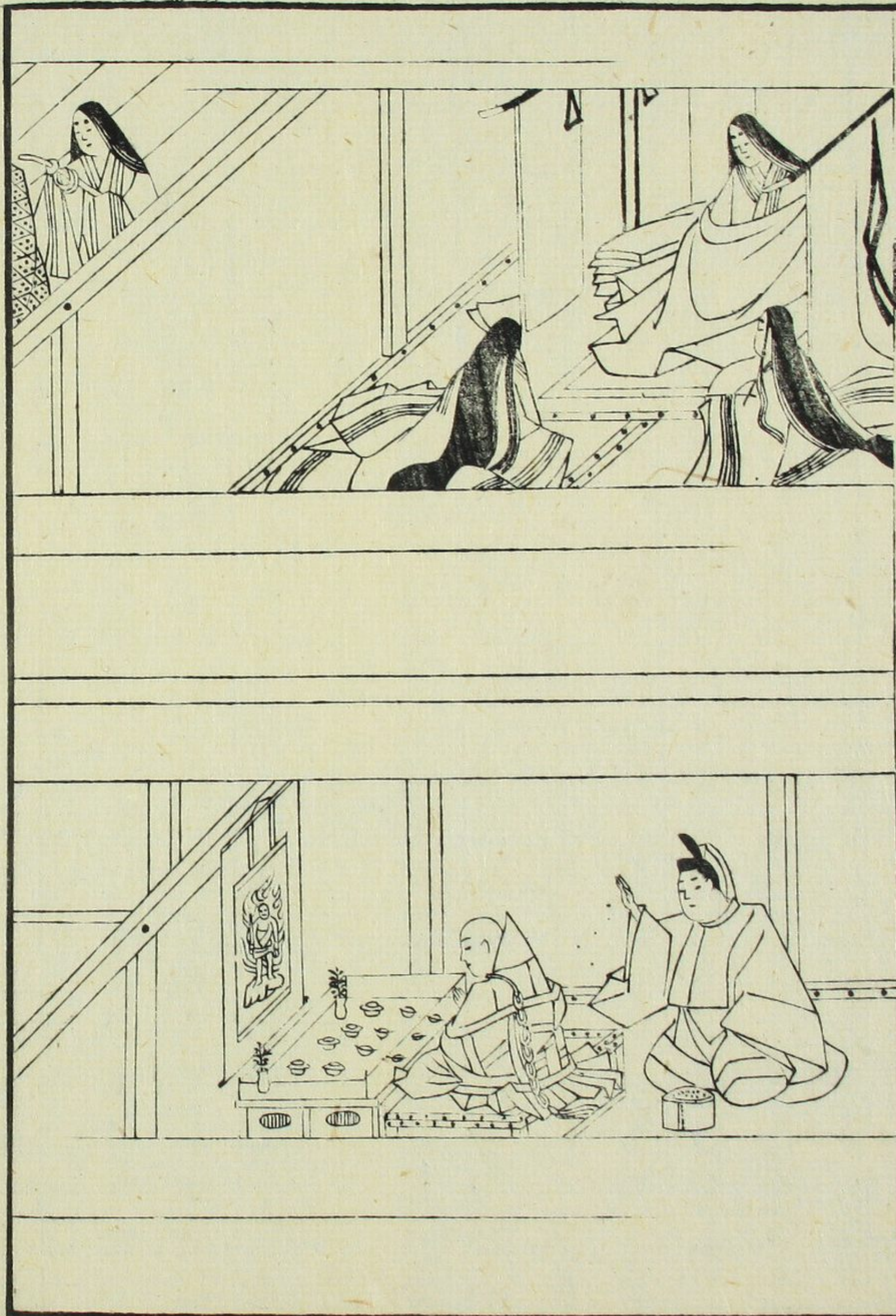
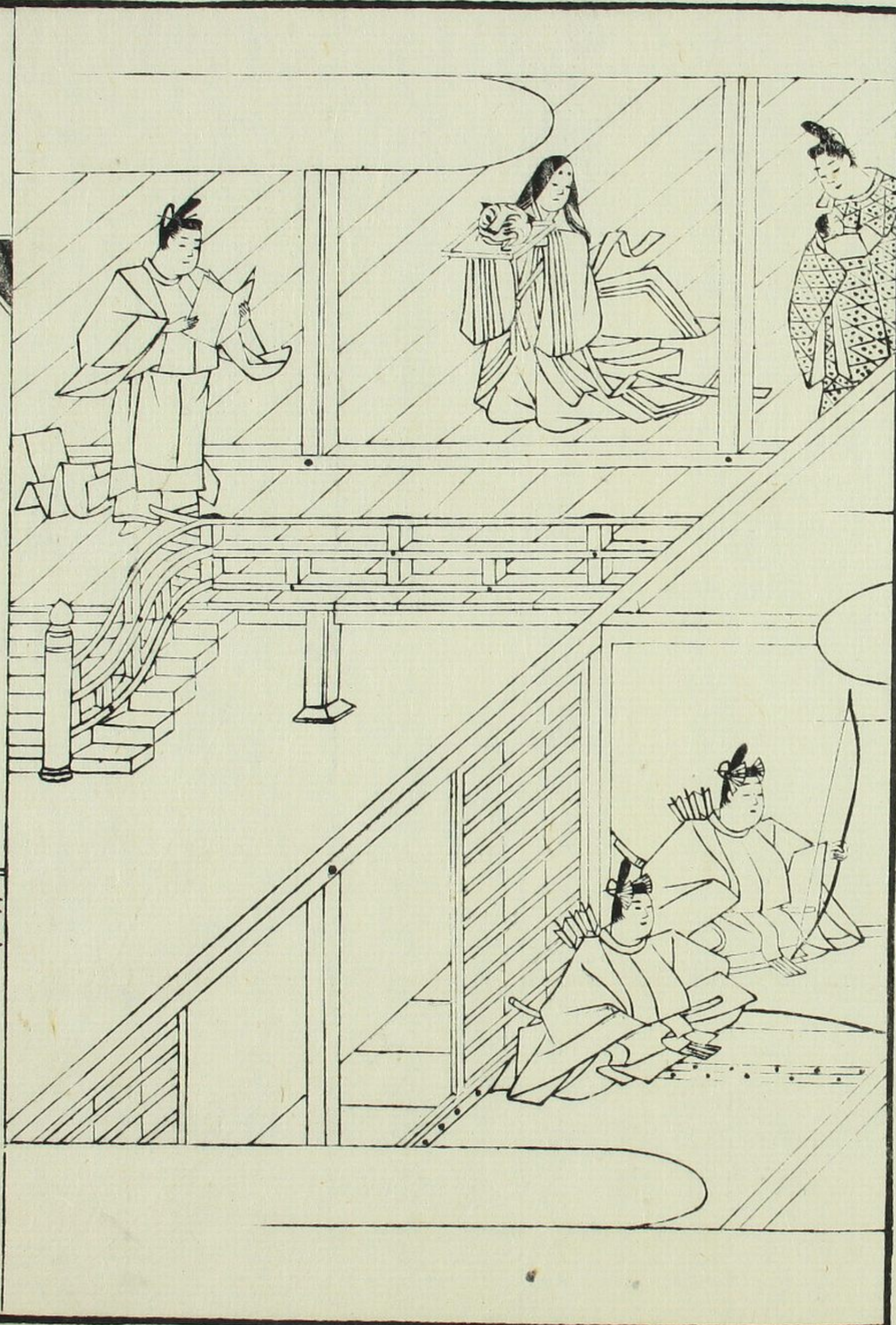
ろかよめでたし。まことよ内一より御をかしすなはち  
もて参りたり。御つかひよ頼定の中將なり。祿など  
心ことなりつらんをさるハ伊勢のきてぐら使もま  
だ歸らざりつれば、内の御使えひた、けてまゐりす。  
女房の白さうぞくともと見えて、つゝふくる唐櫃  
などもてきさわぐ。御ゆどの酉の時とぞある。其儀式  
ありさまハ、えいひつゞけず。火ともして宮下部ど  
も、こどりのきぬのうつゝ、白きたうじきともよてみ  
ゆまゐる。よろづの物も白きおほひどもあがり。宮の  
さぶらひのをさ仲信かきてみすのもとよ参る。みづ  
しふたつうるはしくきうぞきたり。とりいれつゝ  
うめて御ほどきよいる。十六の御ほどきなり。女房み

いまき 湯寒みて  
湯殿下侍ぞ女官  
上着のまき脚部ふ  
まく布なり

虎のかしら 本草  
綱目獸類部小虎の  
頭骨を枕とまる。附  
ハ悪夢を避くとい  
ひまゝ。初生の小児  
湯下煎して浴せり  
時ハ悪鬼を避け瘡  
疥聖藥等の毒を去  
る由かれハ御湯殿  
の儀式も用ゐる  
なり

つるうち 鳴弦と  
て弓弦を打おらそ  
儀なり。悪魔おそる  
と云ひ傳ふればふ  
り  
史記の第一の巻と  
ハ五帝本紀をいふ

な白き装束どもよて御ゆどの、いまきなどみなお  
なじりなり。御ゆどのハ北野三位さぬきの宰相の君御むかへ  
湯ハ入道時通女大納言の君なり。宮ハ第一皇子殿いだき奉らせ給ふ。御は  
かし小宰相のきこ虎のかしらハ宮の内侍とりて御  
さきよ参る。御つるうち五位十人、六位十人、御文の博  
士ハ有國三男藏人辨廣業、かうらんの許よたちて史記の第  
一の巻をぞよむ。護身よハ浄土寺僧都さぶらひ給ふ。  
雅信子雅通の少將うちまきをの、あがりて、僧都にうちか  
けておぼ、れたまふぞをかき。白装束どものさま  
ざよなるハ、墨繪の心ちしていとあまめかし。日  
ごろわれもくと、あがりつる、白装束どもを見せむ  
いろゆるされたるも、織物のもからぎぬ、同どう白き



源氏物語



なり其文の黄帝者  
少典之子姓公孫名  
曰軒轅生而神靈弱  
而能言幻而術長  
而數成而聰明倍  
五氣五種撫萬民  
諸侯皆尊軒轅為天  
子とあると三遍朗  
讀する由御産部類  
記ふるもなほ文帝  
の紀孝經天子の章  
などとも漢む例あ  
り  
うちまき 散末の  
りふと打まけ、  
珍鬼おそれて退く  
とありおほ、れい  
知らむ顔するとい  
ふ  
心ゆくある本文  
附ふかよひてめで  
たき句などかきた  
るならむ  
ぬひ物螺鈿 鑲物

なまきバ何とも見えぬ。ゆるされぬ人もすこしおとな  
びたるハ、いつへのうちきふ織物のむもんなど、志ろ  
う着たるもさるかたふ見えたり。扇などもわざとめ  
きてかゞやうさねど、よしばまかくして、心ばへある  
本文などかきたる、なうくいとめやす。若き人とハ、  
ぬひ物螺鈿など袖口よおきくちをし、志ろかねのさ  
りのいとしてふせくこし、よろづよ志ささぎあへり。  
雪ふかき山を、月のあかきよ見えたし、ゆるやうあり。  
まねびやるべきかこたし。三日ふならせ給ふ夜ハ、宮  
司大夫齊信よりはじめて、御うぶやしなひ仕まつる。左衛頼通  
門督ハおまへの物、沈のかけばん白かねの御皿ども  
など委しくいえず。源中納言俊賢、藤宰相實成、御ぞ御むつきこ

小青貝をいさなる  
ならむおきくちと  
も今ふくつせんとい  
ふもの、こころを  
ぬへし  
御まへの物云、  
中宮の侍前の膳  
部なり沈のかけを  
んとハ沈香木ひて  
造れるかけこころ  
膳なり  
ころもこころ云、  
御産部類記の御衣  
管銀泥とぬる其玉  
小銀の沙瀬同じ鶴  
魚小松を付く折立  
龜甲白織物を用ゐ  
るといふ  
勸學院の東後、  
勸學院と藤原冬  
嗣中立つる校舎、  
て藤氏の子弟入  
字の所なり故小宗  
家不慶ある時ハ

るもなこのをりたて、いれかこびらつ、みおほひ志  
たるつく急など、同一白さなれど、志さま人の心々見  
えて志つくしよたり。五夜ハとの、御うぶやしなひ  
せさせ給ふ。十五夜の月くもりなく、秋深き露の光り  
もめでたき折なり。上達部殿上人まゐりたり。東の對  
よ西向よ北をかこりてつき給へり。南の庇よ北むき  
ふ、殿上人の座ハ西をかみなす。白き綾の御屏風をも  
やのみすよ添へて立てわたしたり。月のさやけきよ、  
池の汀も近うが、り火とも灯されたるよ、勸學院の  
衆徒もあゆみて参れり。げぎんの文ども啓す。祿ども  
給はず。こよひの有さまことよおどろくしう、ゆ物  
の教もあらぬ上達部の御ともものをの志ども、隨身

學生祝賀のよち行  
列しく奉るあり  
之を勅学院のあゆ  
みと云ふ  
げざんのふみ 現  
奉の文あて現奉  
賀する人の連名が  
まなり

同じ心小髪あげて  
配膳仕うまつる  
ものハ髪のおちり  
らぬやうふむまび  
何ぐるやうごめん  
ハ侍盤をうごし

みやの下部などこゝかゝこにむれるつゝうちをみ  
あへり。あるハそゝかゝげ不急ぎわさるも、ゆきご身  
ふハ何ばか聖の歡びかあらん。されどあさらしく出  
給へる光りもさやけくて、御かげふかくれ奉るべき  
なやりと。思ふが嬉しうめでよきふるべし。所々のか  
がり火たちあかし、月のひかりもいとあかきよ、殿の  
内の人々ハ、何ばかりの敷もあらぬ五位なども腰  
うちかゞめ、世又あひ顔よそこはかとなく、ゆきちが  
ふもあひれよ見ゆ。若うさべき心やすき程の女房ハ  
人もものまるる。同ド心よかみあげて皆白き元結志た  
す。白き御はんどもとりつゞきてまるる。こよひの御  
まかなひ、宮の内侍ものくちやんごとなきけはひ

攤打ち給ふ云々  
雙六の戯れなり紙  
の和どの海とらか  
けものゝまなるべ  
らうがろゝと乱が  
こゝなり

むらさき 紫式部  
のやなり 上東門院  
ふは(まり)しよん  
の知(所)なり

あゝり。かみあげたる女房わかき人々のきたなげか  
きどもたれば、見るかひありてをかゝうたうん。上達部  
ども<sup>道長</sup>殿を始めたてまつりて、攤うち給ふよ、紙のほと  
のろん聞きあくゝらうがはじ。歌などあり。さきども  
のさこぐーさよまぎをたる、尋ねまど志どけなうる  
繁ければ、えぞかきつゞけはべらぬ。女房さかづきあ  
どあるほどよ、いかゞはと思ひやすらはる。  
めづらしき光りさゝそふさかづきハ、もちながら  
こそちよをめぐらめ。とぞむらさきさゝめき思ふよ  
四條大納言すのもとよる給へれば、歌よりもいひい  
でん程のこごづかひはづかしさをぞ思ふべかめる。  
かくて子どもはてゝ、かんだちめよハ。女のさうぞく

ま大うちきなどそへたり。殿上の四位よりあはせの  
ひとかさね袴五位よりうちき一かさね六位より袴ひ  
とへなり。まいの有様どもなるべし。夜ふくるまで、う  
ちよもさまぐめでうてあけぬ。

正月廿日(寛弘七年)の得  
これより道者の得  
恙なるふ引か(伊周  
の失望)を病ひづ  
きたる後のみをか  
けるこ其心ふてえ  
るべし(司召)上  
小注せり

寛弘七年  
正月廿日あまりふなれば、世より司召とて馬車の音  
も志げく、殿原の内ふ参り給ふなども聞ゆきを、あは  
きふいみど。大姫君はたゞいま十七八ばかりまで、御  
ぐしこまやかふいみじう美しくげまで、たけに四五  
寸ばかり餘り給へり。御のこち有様あいぎやうづき  
けぢかうらうたげよ色あひなどいみじう美しくう  
て、白き御ぞどもものうへふ、紅梅のかさもんの織物を  
着給ひて、濃き袴を着たまへる、あはれにいさじう美

いとあうとくふ云  
云 ちうとくは宿  
徳なりおとなしく  
まゝいさじういふ

ついでちの御装束  
の云く 元日小形  
らしくせし衣の着  
なれたるさま

かう小巻ものさま  
き 香染とて茶色  
のかきものこ

くしげなり。中伊周次女ひり君十五六ばかりまで、大姫君より  
ハ少し大きやかまで、いと志うとくよものく志う、あ  
な清げの人やと見え給ひて、御ぐしいたけよ三寸ば  
かりたらぬ程まで、いみじうふさやかまたのものげ  
に見えたり。色々の御ぞのなよかま皆かさなりた  
る、ついたちの御装束どもの、なえさるほど、見えた  
り。いみじうあはれふ美しくしげなる御かこちどもよ、  
母重光女北のかささ、やかま大どかなるさままで、只今三  
十よばかりまで見え給ふ。それも又いと清げまでお  
はす。藏人道雅の少將いと色あひ美しくしう、かほつき清げ  
ふあべき限り繪ふかきたる男のさまして、かうよう  
すもの、着き重ねよるわり衣に、濃紫のかた紋のさ

年ごろの御物思ひ  
ふ云、この文  
いふとちちちち  
おとつるを年本  
の御物思ひより  
月ごろ病み給ひて  
云くとつづく脈ふ  
り

志びらどもかごと  
むりり云、志び  
らハ褶あて和名抄  
衣服類ハ褶敷也  
覆袴上之衣也と  
る是なり俗ふとも

しぬき着て紅のうちきぬなどそ着給へる。色あひ何  
となくよほひ給へるふまゝにていたうなき給へれば、  
おもて赤み給へり。帥殿伊周もかち身のざえ世の上達  
部ふ餘り給へりともまていはせ給ひつるが、年ごろの  
御物思ひよふとりこちたうおはしましつるを、おの  
月ごろなやみ給ひて、やうち細り給へるが、色あひ  
なごの更ふかはり給はぬをぞくおそろしき事よ  
聞ゆる。此姫君たち能おはせれば、かごじけながりて、  
御烏帽子ひきいれて伏し給へり。若やかなる女房四  
五人をかり、薄色の志びらとも、かごとをかりひきゆ  
ひつけたり。何事も志めりあはせふをか。つひよ正  
月廿九日伊周ふうせ給ひぬ。御年廿七にぞおをしける。こ

とて雲の腰の上ふ  
まといが常なるを  
こ、ハ衣を照して  
袴のみをかけたる  
くかくまるを人を  
教ふ時まで同室の  
みあるふと物まる  
予ちかごとむり  
り今今の俗法不云  
ひひけほどとのふ  
小同じ

年ごろハさうとも  
のこのみふ云、  
是迄ハ故定子中宮  
の生み給へる教康  
親王の東宮ふ成り  
給ふやうもやと  
ゆい、ゆい居たる  
みかく上東門院の  
さしつ、さし皇子を  
生み給へるうへハ  
所詮望みもか  
なれどと落膽し  
て病死せしとの

の姫君たち、少将たごさりとともとおぼしけるふあさ  
ましうものも覺え給えず。只おくれじくと泣惑ひ給  
へど、かひあるふあらば、おそれぬ。いとみじうあ  
それともおろかなる。只今いとかくしもおろします  
まどき程ふ、かくはかなきさまになり給ひぬれば、年  
ごろさりととも御たのまふらづ心能どかおぼ  
しわたりけるを、中宮彰子の若宮第二いま宮第三さしつきて、月  
日のごとくよそて、光りいで給へるふ、すべてつなう  
今ハかうよこそとおぼしつるふ、御病ひもつき、御命  
もつづめてけるよや。おの殿の君たちをばさらなり。  
中納言伊周弟や頼親のくらのかみ、周頼同上の中務大輔など、  
ふハ、この御はらからども、哀し思ひ歎き給へり。一備子品

孝ありずつな  
術なり少とせんま  
べなきといふ

いん蔭 此奉おわ  
一条天皇寛弘八  
年六月廿二日册  
ありて石蔭といふ  
所おをさめなり又  
其九月不辨の資  
序纂より  
石蔭の烟り  
ふりきうねて  
公れの心地せし  
なとよみしるも  
るおよりてまら  
づけつ

宮教棟一宮などの御けきもおろかなるべきふもあら  
ず思ひやるべし。あなまこふいみじき世の中なり。

九 いん蔭

かくて一條院ふりざいりてわりさせ給をなむとのこ思し  
の給ハすれど殿御堂の御前ゆるし聞えさせ給をぬほど  
ふ例ならずなやましうれをしましていらなるる  
うとおぼして御つしり。中宮上東門院彰子も志づ心なく歎  
らせ給ふ程よまめやりよ苦しうおぼしめさるれを  
こまよりおもらせ給ふやうもこそあれと何事も  
ぼしわうざる程ふいうでともかくも思しめさる。  
御ものけなごさまぐ繁きさまなり。此頃一條院よ  
ぞねをします。夏の事なれをさらぬ人ごよやすくも

一の宮とくこく云  
云 敦康親王六當  
帝第一の皇子なれ  
バ帝も之を次の東  
宮ハハと思せし  
彰子の覚悟せる由  
なり

一の宮の地方云々  
此方さまの人くハ  
彰子中宮のまみ給  
へる第三皇子こそ  
道徳の後見もこれ  
バ東宮ハハ必定此

あらぬふいミドウ苦しげなをしますも、見奉りつ  
ううまつる人やすくもあらむなげく。六月七八九日  
のふどなり。いまハうくておりのなむおぼすをさ  
るべきさまよおきて給へやねせらるを殿道長うけ  
たまハらせ給ひて、東宮三條院御さいめんこそハ例の事  
なむとしておぼしおきてさせ給ふほど、東宮次よハ  
の宮をそこそれおぼしめすらめや、中宮上東門院彰子の御心の中ふ  
もおぼしおきてさせ給へるよりへねをしまして、東  
宮の御さいめむいそがせ給ふよ、世人いりなるべ  
いよりとゆるしう申し思ふよ、一の宮の御方さまの人  
人後一條わり宮かくてこのものういミトき御中より光り  
出でさせ給へるいとまづらハハハハさやうよこそハ

若宮ならんと思へ  
るなりとつらう  
うハヨがため妨げ  
よなりてこと俗  
面倒といもんが如

世におどろくし  
り世間おてハ帝  
の侍悩と驚くべく  
申したれどさま  
ハなく物なごも心  
地よく仰せられ  
ハ世人の虚借と思  
ひ知り給へりこと

せおもひ聞えさせたり。又或ひハいでやなどおし  
り聞えさせたり。三條院東宮行啓あり十一日ふわさせ  
給ふほど、いとトうめでたし。一條院ハ、いっよれを  
しまさむすらんより外の歎きたれよ、東宮がこの  
殿上人など思ふ事なげなるも、常の事なづら世のあ  
たもなる事たゞ時のまよぞかハりける。さてわら  
せ給へきをみすごし御對面ありて、あるべき事ど  
も申させ給ふ。世よおどろくし聞えさせつとど  
いとさきやりよろづの事聞えさせ給へを、世の人  
のそらごとをも忘けるうなと宮ハ三條院おがさる位  
も譲り聞えさせ侍りぬと、東宮ハ後一條院わら宮をあん  
物をべり侍る。道理のまゝあらむ、叡康帥宮をこそいとお

世のつらうより云  
云時勢は後ひて  
東宮も成り給ハ  
ず絶念し給ふこと

もひ侍せは、はぐし、後見なども侍らねばなん。大  
かこの御政も、年ごら親しくなど侍りつるを、のこ  
どもよあうい有るべきものなり。みどり心ちおこ  
たるまでも、いとげ侍りなんとし侍り。又さらぬふ  
てもあるべき心ちも、志侍らぬなど、さまあぐあを、を  
申させ給ふ。東宮も御目のごハせ給ふべし。さてかへ  
らせ給ひぬ。上東門院中宮ハ後一條宮の御事、さだまりぬるを、例  
の人よ、ねをし、まきバ、ぜひなく嬉しうこそハおほし  
めすべきを、一條院ハ道理のまゝ、よとこそハねがしつ  
らぬ。かの宮も、さりとともさやうふこそハあらぬや、お  
がしつらんよ、かく世のひらきふより、ひきたらへね  
ほしおたつるふこそ、あらぬ。さりとともと、遠心のうち

そと中宮ハ心ぐる  
しう思す

おのづから宿世  
まりせて云々 若  
宮ハ去年も幼けれ  
バ唯今亦さふなら  
ずとも自つら天  
運お任せおきてよ  
うるべしと思しめ  
ま

さるべきもなれば  
云々 中宮の侍  
るに然るべく道理あ  
るにたがら帝の祈  
願お祈せらるるに  
を宜しからむと制  
し奉るるもありが  
たし

のなげりしう安うらぬるまをこそ思しめす  
らめといまどしう心ぐるしういとほし。わう宮ハまど  
いとをさなくおハ一ませバおのづから御宿世ま  
うせてありなん物をなぞおがしめて殿の御前ま  
もなを此ういうでさらで有りましうなとなん思ひ  
侍る。の御心のうちハ、年ごろ思しつらん事  
のたがふをなん、いと心ぐるしうこりなきなど、なく  
あくといふバうりま申させ給へバ、殿の御前げよ  
と有り難き御ことよもれをしますすうな。又さるべき  
うなればげよと思ひ給てなんおきてつうまつる  
べきをうへれをしましあべいりどもをたぶくと  
おほせらる、ふいな猶あしう仰せらるるなり。次

かくてせ侍るお  
云々 道ちのかく  
存生のうちお  
外孫の宮の太子お  
ていますをん  
方心安く腹まべ  
く後生の程もめで  
よらむと

第よこそや奉しうへすべきも侍らず。世の中い  
とこのなり侍せむ、うくてせよ侍るお、さやうならん  
御有様も見奉り侍りなむ、後の世も思ひなく心やす  
くてこそ侍らめとなんおもひ給ふると申させ給へ  
バ、又これもことこりの御事なれむ、うへし聞えさせ  
給はず。へハ御心ちのくるしうねがえさせ給ふま  
まよも宮の御前をまつハ一聞えさせ給へバ、うの時  
立さり聞え給をむ。いとくるしうげよれをします。御讓  
位六月十三日なり。十四日より御心ちおもらせ給ふ。  
わう宮東宮ふたせ給ひぬ。世の人驚くべくもあら  
む。あべいりと思ひたりつとぞ、御腦このほど、一宮  
の御前立さらむ扱ひ聞えさせ給ふも、御心のうち推

あいかり 俗不何  
となくといふお  
なり

法性寺 捨茶抄不  
九条河原とあり花  
巻餘情ふは公の  
建立し給へる由見  
えり

量らま心ぐるうて中宮もあいたう御おもて赤む  
心ちせさせ給ふ。一品宮もよろづおぼしみごきたる  
うちも、一宮の御事れうゝるをそへなげりせ給ふ  
べし。東宮の御事などすべて宮の何ともおぼえさせ  
給ハねバ、只殿のうづぐお御いとまあく内東宮院な  
ども参り定めさせ給ふ程えもいとあさましきま  
で見えさせ給ふ。法さいをひうなるとめでしく見えさ  
せ給ふ。うくて院の御なやまの重らせけむバ、御ぐ  
しねろさせ給ハむとて、法性寺の座主院源僧都めし  
て、おかせらるゝうどもいとどうりなりともおろり  
なり。中宮我もあらず涙も沈みておはります。一宮  
一品宮などいとどう思へりたり。東宮の御乳母た

かくて書し  
石孫抄も十九日  
先皇御出家法名  
精進堂御歳三十  
二と見え

此修法など云々  
尚平愈の祈禱が  
どい止めて未ま  
念じ給ふ

ちの、おもひさるけしき、今をしもいとめでたし。うく  
て御ぐし六月十九日辰の時よれる。をてさせ給ひ  
と、あらぬさまよておんしま。中宮えをたあへさせ  
給えず。おもひやり聞えさすべし。さてだよひらう  
ふれなしまさバ、いやめでたき清みさまなるべきい  
とどれつ院よこそはれとしますべきをすべてねを  
しますべうも、見えさせ給をぬこそいとどなれ。此修  
法など今いとめさせ給ひと、念佛などをきりや  
とのさまいすも、唯今おなごやうよひらう  
おはりますべき御祈り乃ごある。さまともいやか  
べりりの御有様をそむらせ給ひぬまバ、さまとも  
このもりのご後もおぼりたり。たるふ、五よて東宮



ふく、せ給ひ、せよて御位まつらせ給ひて後廿五年  
みぞならせ給ひよれど、いまの世のみくどのうり  
りのどろふたもせ給ふやうなし。村上の御子こそ  
ハ、せよめでたれととひよて、廿一年おひきまけ  
圓融院のうへ、ふよめでとき御くらおきて類ひな  
き聖の帝とさへ申しけるよ、十五年ぞれをしましけ  
るよ、かうくうわとしましつきをいさどきよみせ  
の人申しおもへど、御心ちのなやいさどく重らせ  
給ひと寛弘八年六月廿二日の晝つう、阿さまう  
あらせ給ひぬ。そこの殿上人上達部殿、ばら宮の御  
前、一宮一呂宮、すべて聞えんりな。殿道長の御前、えも  
いとずいさど、心ちせさせ給ふともおろなる。

そこの御修法の檀ども、こぶち、僧ども、の物とこび  
の、あるほど、いや物ささぐうさま、ぐふ哀なる事  
おわたり。

日ごろハ、さともおとします御り、この儀式ありさま  
と、うなき御調度よりは、はじめ、例さまおとて、なし聞え  
させ給へど、さしての、ありつるを、けふより、いれそ  
しまし、所を、御念佛の、おとけを、しまさせ、僧など  
の、なす、すぐも、いさど、うり、どけ、なう、つよ、つ  
たし。念佛の、勢の、日の、くる、ほど、後敷、なご、の、いさど  
う、あ、それ、よ、さま、ぐう、か、き、お、わ、く、て、ま、さ、せ、給  
ふ、御前の、なご、ことを、人の、折り、て、と、集り、たる、を、  
宮の、御前、に、御硯、が、め、よ、さ、せ、給へ、る、を、後藤院東宮、とり、ち

後敷などの、  
夜半、よつ、八人、定ま  
り、あ、り、お、ま、れ、い  
通敷、念佛の、勢、ひと  
きて、哀、ふ、ゆ、る、こ



上東門院

一<sup>敦康</sup>の宮別納よ、ねをしま屯。中宮より宮くよおぼつう  
ありらむおとづも聞えへせ給ふ。九月をうり小辨の  
資業一呂宮ふ参りて、山寺ふ一日まうりさうふい  
さうげのねをしましふみまゐらせしうばあをれふ  
おもひ給へらむて、

石蔭のけふを霧ふりかぬて、その夕ぐれの心  
ちせしうあ。

石蔭の云々  
新四ふあり

標  
注 榮花物語抄卷二 終

